

俺の高校には、『放課後 殺人クラブ』がある件

ウソツキ・ジャンマルコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校生、桜木 樹とおなちゆうの「蘭子」は、奇妙なメガネっ娘「暦」と出会い、学校の部活『ロダン部』こと、謎の（裏）部活『放課後殺人クラブ』に入部すること……。部長である銀髪の美少女「みやび様」には、殺人の依頼が……。ラッキースケベ系の同級生「蘭子」とさまざまな事件に巻き込まれていく事に……。主にラブコメ、時々シリウス & VRMMO。さあ……。どーてーゲームマーの「樹」は、どの女の子を攻略できるんだ？連載中の小説『罪人のシユラ』と、話がリンクしていきます

目次

当選しました	1
自慢	7
門番は？	12
城2	19
酒場	24
道場	29
防具屋	34
ぶかつ	39
本	44
みやび様	49
コーヒー	54
視線	59
タイトル	63
コーヒーには	67
入部	73
ケルベロ	79
けるべろ2	85
けるべろ3	90

当選しました

俺の名前は、桜木 樹（さくらぎ いつき）16歳。

特権階級の生徒のみが通う、進学校『聖ペイズリー付属高校』に通う高校一年生だ。

特権階級とは、日本の人口の約5パーセントの人のみに与えられた階級。

政治家、医者、貴族からなる『α』（アルファ）

経済界の人物からなる『β』（ベータ）

芸能、スポーツ界からなる『Γ』（ガンマ）

の三階級で成り立っている。

俺の階級は『β』

俺の親父は、その親父、要するに俺の祖父が興した事業で成功して財を成した。

この学校には、そんな奴らの子供しかいない、御坊ちやま&お嬢様学校というワケ。

この学校に入学して1ヶ月：学園生活は、何不自由ないが、退屈で刺激のない日々だ。

早く家に帰ってゲームがしたい。

俺は、今日も教室の窓際にある机で、肘をつきながら、無駄に青い空を眺めている。

「ねえ、樹！

今日の放課後さあ、駅前に出来た、アメリカ発の新しいスイーツのお店に行こうよ！」

「なんだよ、蘭子？」

また、甘ったるくて、カラフルなだけのおやつに、踊らされてんのか？」

「もう、樹ったらー…ロマンのない言い方しなでよね！」

蘭子は腰に手を当てて、頬をぷくつと膨らませる。

可愛いじゃないか。

わざとだとわかっていても、俺はこんな仕草に弱い。

男は、だいたいそうか。

こいつは、倉敷 蘭子（くらしき らんこ）。

中学の頃からの同級生だ。

蘭子も俺と同じ『β』

金色の長いポニーテールが特徴的で、少し意地悪そうな目つきをしている。

中二から同じクラスで、高校に入ってもなぜか一緒のクラスになった。

そのせいかどうか知らないが、いつも俺に話しかけてくる。

俺の事が好きなのか？

なーんつつて。

俺もそこまで自惚れていない。

それは、蘭子が口は悪いくせに、バランスのとれた身体と、整った顔のおかげで、

男子生徒からは人気があるらしく、早くも数人から告白をされたという噂を耳にしている。

そいつが、なんとか普通を保とうとしているレベルの俺に、惚れるわけはない。

気軽に話せる男友達として、つきあってるんだろう。

まあ、いいさ。

可愛い子が近くににいるのは、うれしい事だ。

蘭子は携帯をいじりながら、話している。

「そのお店、いつも並んでて…入るのに二時間待ちなんて、当たり前らしくて。」

これから、もっと入れなくなるかもしれないだよ。

でもパパがさ、オーナーと知り合いでね、今ならすぐに入れるように連絡してくれるんだって！

ね、だからさあ行ってみようよ！」

「あゝパスパス。」

俺、人混み苦手だから」

「嘘ばっかり！人混み苦手な人間が、毎年開催する大きなゲームイベントに行けるワケないでしょ！」

「あれは、人じゃない。」

あそこにいるのは、キャラだから…

だから、全然ダイジョーブなんだよ」

「もう、へりくつばつか言って！」

へりくつ…だと？

人が頭で考え出した「理屈」に、わざわざ「へ」をつける必要があるのかい？

ぷっ、て事？

わらってんの？

それとも「屁」のような「理屈」って事？

でまかせのように、口から出たから？

じゃあ、俺の口は、肛門って事？

すっぱまんってこと？

今度から、座薬は口から入れろって？

あんまりじゃございせん？

でも、蘭子は可愛いから、何も言わないでおこう。

パパとママに感謝しな！ご先祖にもな！

そんな事を思っていたら、無駄な会話にもう一人、うるさいのが参入してきた。

「なあなあ！もしかして蘭子の言ってる店って、アップルキャンデーの店だったりして？」

「そうそう！何？カズチカ、行った事あるの!？」

「あつたりめーじゃん！」

流行には、まず乗っかるのがモテ男のキホンっしょよ？」

この、明らかに賑やかしキャラの男は、是木 和親（これき かずちか）

同じクラスの男子で、席が俺の前になってから、不覚にも懐かれてしまった。

明るい髪に、ピアスをつけた、チャラツチャラ男。

ムダに社交的で、男女共に広く浅く付き合いをしているタイプだ。もし、うちの学校に伝説の木があったら、こいつと仲良くして、いろんな髪の色の子の情報の情報や、俺の評判を聞くんだけど、残念ながら、伝説の木はない。

だから、カズチカも、たいして役にはたたない。

蘭子が、アップルキャンデーの店に行ったカズチカに尋ねる。

「ええ、そうなんだ！…カズチカ、どうだった？美味しかった？」

「そりやそうっしょ！全然ちがうんだから！」

…なんとだよ

「やっぱそうなんだ！いいなあ！」

今ので何がわかったんだか…

我関せずの姿勢で、空を見ている俺の肩を、蘭子が揺らしてくる。

「ねえ、樹、やっぱ流行ってんだって！いいじゃん樹！…いいこーよ？」

「行かないって…だってアップルキャンデーって、要するにりんご飴だろ？」

んなもん、祭りの夜店で食べよ」

「ええ、アメリカだよ？ニューウエーブだよ？食べとこうよ」

こいつらの脳内は、一体どういう思考で動いてんだよ？

蘭子がしつこく俺の肩を揺らしていると、

「ピッコロン〜ピッコロン〜」

とメールの知らせが、俺の携帯から鳴った。

(メールか？珍しいな)

画面を見ると、件名に『ギルティ&ギルド』と表示されている。

俺は、脳天から足の指の先まで、稲妻が駆け抜けた。

「つつつつつつ!!」

体が弾けて、声にならない声を発した俺に、蘭子もカズチカも驚いている。

「なんだよ、樹：『クールハイスクール』が二つ名のお前が、ガッツポーズなんて、

一体どうしたって言うんだよ？」

二人の声は俺の耳には入らない。

俺は、どうしても心から叫びだしたくなかった。

でも、誰もいない場所がいい。

学校のどこかに、叫んでもいい場所は!?

そうだ、屋上だ!

俺は二人を置き去りにし、携帯を握りしめて、屋上を目指して走り出した。

「いつきーっーっー!」

背中であらゆる愚民の声を聞き捨てながら、俺は階段を駆け上がった。

今の俺にとってみれば、まさに「天国への階段」と言ったところだ。

二段飛ばしどころか、四段:いや:地に足は付いていなかっただろう。

そう、俺は今、浮かれている!

屋上への扉を開けると、運良く誰もいない。

俺は、母親の胎内から、この世に誕生した時と同じ、心からの叫びの言葉を今、とき放った!

「つつしやおらーっー!!!」

慣れない事をして、少し気が遠くなりそうな目眩を味わいながら、もう一度メールを見る。

「ギルティ&ギルド 参加 当選 の案内」

間違いない。

俺は、当たった。

最高のゲーム、『ギルギル』が出来る!

『ギルティ&ギルド』

とは、日本発のVRMMOで、5年前に開始されている。

しかし、参加者には厳しい参加資格の審査(特権階級以上)と当選が必要で、

そのうえ、参加補償金として、一千万円を預けなければならないゲームだ。

なぜ、そこまで厳しい条件があるかというと、そのゲームの大きな特徴の一つ、

「リアルハントシステム（RHS）」があるからだ。

その内容は、参加者はゲーム内のキャラクター『チエイサー（追跡者）』を操り、『シユラ』と呼ばれる世界にいる、

『罪人』を狩るのだが、

その世界『シユラ』は日本に実在し、

その世界に『罪人』は、本当に生きているのだ。

簡単に言えば、

|| バーチャルで、リアルの人が殺せる ||

と、いうわけだ。

『罪人』とは、実際に日本で罪を犯し、シユラに島流しにされた人間だ。

その為、殺人ではなく、

（処刑）もしくは（仇討ち）

という形で、法律で認められている。

今まで、数々のゲームをやってきた俺には、これ以上のゲームはないと思っていた。

開始された頃に小学生だった俺だが、すぐに応募をしていた。

金は、俺に甘い母に頼んで、成績やテストの点数に応じ、賞金を巻き上げていった。

そのおかげで、ずいぶん学力も伸びたものだ。

そして、5年の歳月を経て、俺は参加資格の当選を果たしたというワケだ。

俺『桜木 樹』は、まさに今、新たに誕生したと言っている。

『罪人を狩るチエイサー』として

自慢

俺は、何もなかったかのように、教室に戻った。

他の生徒と話しをしていた、蘭子とカズチカが俺に気づき、走り寄ってくる。

「樹！どうしちゃったのよ…いきなり教室出て行ったりして…」

「そうだぜ…心配するじゃん？」

「悪い悪い…大した事じゃないから」

俺は、『ギル2』に当選した事は言わずに、席に着いた。

二人に話せば、きつと大騒ぎするに違いない。

学校中の、話題になるだろう。

『ギル2』は、ネットを通じて、全世界に配信されている為、合法の「殺人シヨウ」としても有名だった。

その動画は、子供でも閲覧できるようになっていた。

残酷な場面もあるが、殺されるのは犯罪者である為、犯罪抑止にもなると、許可されている。

それよりも、「殺人」という血なまぐさいものも、罪人への「仇討ち」というベールで包めば、

立派な「ヒーローシヨウ」となり、世界中でも大人気になった。

いつの時代も、勧善懲悪は人気があるんだ。

俺が、その主役である「チエイサー」になった、と言えば当然騒がれてしまう。

派手な戦いや、有名な罪人と戦ったりする、カリスマのチエイサーになれば、

スポンサーも付き、動画の収入などを含め、莫大な収入を得ている者もいる。

もちろん、罪人には懸賞金が付いている為、その金額だけでも、参加料の一千万円など、すぐに取り戻せるのだ。

今ここで、俺が「ギル2」の事を言わないのは、俺の性格に理由がある。

俺は、目立つのが好きだ。注目されるのが好きだ。ただ、条件がある。

『俺は、そんなつもりもないのに……結局目立つちゃったか!』……のパターンが好きなんだ。

高校生というものは、これみよがしに自慢をしたいものだ。

チヤホヤされたいものだ。

だが、それは素人の考えだ。

素人の高校生だ。

そいつらは、言うなればクラスの中で、ただ、はしやいで騒ぎ、目立とうとする奴だ。

そんなものは、元気な奴なら誰でも出来る事なのだ。

俺は、そんなものには興味はない。

もし、俺が自慢できるものを持っていたら、絶対に自分からは言わない。

誰かに見つかるまで、じっくりと待つのだ。

チラ見せさせたくない。

じっくりと待っている間に、俺の中で「自慢」はしつとりと濡れて「熟成」し、不思議と香り出す。

その微かな変化に、誰かが気づく。

そんな敏感な奴は、得てして有能な奴である事が多い。

そいつが言う言葉には、力がある。

説得力、持続力がある。

ゆえに、その自慢は、自慢ではなくなり、オーラ、雰囲気として、俺の背後に漂い続け、

勝手に、あいつつて只者じゃない感が、生まれるのだ。

しかし、気づかれない事だってある。

でも、それはそれでいいのだ。

大したものじゃなかった、その位のものだった……という意味なんだ。

多くの犠牲を払って手にするからこそ、輝くもの、それが「自慢」だ。この「ギル2」は、必ず、香り出すレベルのものだから、今、あえ

て言う事など、愚の骨頂である。

俺は、ただ静かに何もなかったかのように、いつも通り、退屈そうな顔をしながら、窓の外を眺める。

例え、心と体の一部が、エレクトロしたりパレードをしていたとしても、クールでいるのだ。

蘭子とカズチカの二人は、さっきの俺に漠然とした疑問は抱きながらも、話しを戻してきた。

「ねえ、樹ってばーさっきのお店だけど、行つてくれないワケ？」

「ああ、悪い。今日はマジで無理になった。今度、開けとくから、一緒に行こうぜ」

「…わかった…約束だよ」

蘭子は両手を後ろで組み、少し首をかしげて俺を覗き込む。

ふっ…可愛い奴だ。

そういうポーズは、家で練習するのとか？

この角度はちがうなあ…もう少し傾けて、つま先とかも上げちゃおっかな？…とか。

良いじゃないですか…バツチリ成果が出てますよ。

「ああ…約束だ」

俺は、仕方ないな…というアピールをしながら、軽く息を吐いた。

こういう駆け引きが、女の子は好きなんだ。

あえて、仕方なく付き合ってるのが、クールな男ってものだ。

本当は、俺も気になってる。

気になってるんだよ、蘭子ちゃん！

りんご飴？アメリカ飴？

なんだそれは…？

りんご飴なんて、変化のさせようがないじゃないか。

飴でりんごを包んだだけだよ？

どう変化させたの？アメリカーナは？

だが、あいつらの発想力はあなどれないからな。

シンプルじゃないだろう。

ただ、りんごが美味しいのは日本だ。

日本のりんごは、世界一と言っていいくらいの、質だ。

そりゃ、アメリカを代表する言葉のひとつに、「アップルパイ」があるが、

味がどうのこうのではなくて、あれはアメリカの象徴のようなものだろう。

それが、りんご飴…!?

気になる。

がそれは隠して……あえて、蘭子のワガママに付き合うんだ、冷静さを失うな、俺。

放課後になり、俺は急いで、学校を後にする。

早く、パソコンの前に座って、「ギル2」のサイトを開きたいんだ。でも、走りはしない。

クールな男、冷めた男は、走らない。

決まっている事だ。

早歩きもしない。

もつての他だ。

いつもより、少しだけ早めに足を動かすが、ふと立ち止まって、空を眺めたりする。

余裕をのぞかせるんだ。

自然の良さが、わかるとアピールしておく。

誰にアピールするかって？

未来の誰かさん…にさ。

別に今、誰かが見ていなくても、構わない。

この意味不明にしか見えない行動でも、何度も繰り返しておく事で、いずれ意識せずとも自然に出てくる事になる。

その時の、自然さが、非常に重要なんだ。

ああ、この人、きつといつも、こうやって空を眺めてるのね……口マンチツカーな人…ぽっ。

つとなる人が、いる事だろう。

なんたって、女は空が好きだからな。

この行動は、その時のタネだ。
男はタネをまく生き物なんだ。

だから、急がず、騒がず、いつも通りを貫く。

家に入ると、階段を駆け上り、自分の部屋のドアをあけて、パソコンの電源を入れ、立ち上がる間、

ベッドに顔をうずめて、

「つつしやおおらーりー」

と心の叫びを、もう一度吐き出しておく。

でないと、嬉しさのあまり、キーボードを叩き壊してしまってもおかしくない。

まったく、若さというものは、厄介なものだな。

俺は、パソコンの前に座り、もう一度、メールを開いた。

間違いなく、参加当選のメールだ。

そのメールからサイトを直接開くと、

「ギルティ&ギルド」の、正式メンバー登録の画面が映し出された。
登録を終えると、今後の軽い説明に移った。

その内容によると、明日、コントローラーとしての役割を果たすものが、届くらしい。

「ブレインリンク」と呼ばれる、ヘッドギアのようなものだ。

それを使い、キャラクターである「チエイサー」と自分の脳を繋ぎ、思考と感覚で、操作するのだ。

この情報も、サイトには元々載っている事だった。

だが、「ギル2」の情報というのは、ほとんどネット上には出されていない。

あくまで、シユラの世界の中だけで、開示されるものらしい。

情報を漏洩したら、参加資格を剥奪され、補償金も失う事になる。

そのくらい、秘密の多いゲームなのだ。

要するに、本番は明日だ。

ひとまず心を鎮めるために、まだ16時だが俺は寝る。

門番は？

翌日、俺はいつも通りの退屈な学園生活を送り、帰宅した。

俺の部屋の前には、段ボール箱が置かれている。

予想はついている。

おそらく、『ブレインリンク』だろう。

とりあえず、段ボールにはまだ触らずに、カバンを部屋に置いた。

爆弾処理班のような丁寧さで段ボールを部屋に入れ、箱を開ける

と、中から新品の電化製品の香りと共にそれは出てきた。

ヘッドギア型コントローラー、『ブレインリンク』が艶やかな光を放っている。

考古学者が、地中から土器を取り出す時のような慎重さで、箱から出した。

そんなシーンは、一度も見た事はないが…。

だったら、こっちの方がいいか。

俺は、初めて彼女のおっぱいを触る時の慎重さで……

……慎重でいられる自信がないから、やめよう。

ベッドに横になり、頭を入れる部分に入っているプチプチを取り、少しだけ潰し、軽い快感を味わった後、

ブレインリンクを頭にかぶせてみる。

頭と、目、耳、鼻までが覆われる形となり、電源を入れていないのに、

「スウォーン……」

と、少しスピーシーな音がして、ゆっくりと視界がはつきりとしてきた。

ただ、俺は目を閉じている。

これは、画面に映ったり、スピーカーから音が出るワケではない。脳に直接送られているんだ。

もう繋がったんだろう。

イメージでは、細い針を脳みそに刺されているような感じだと思っ

ていたが、そんなサイコな事はなかった。

不思議な感覚だった。

宇宙の真ん中にいるような、無重力の感覚だ。

それが過ぎると、地球が見えて、だんだん大きくなり、日本の地図が見えてから、ある島に降り立ち、

真っ暗闇になった。

そのあと、古いRPGのような白いドット文字で、

「チエイサーを作ります」

「選んでください」

と表示が出た。

オープニングは、無しパターンかな。

チエイサーは俺自身の分身だから、その基礎となる擬似肉体を選ばなければならぬ。

肉体は3パターンある。

日本製 ：平均的な性能 操作しやすい、同調性が高い

アメリカ製 ：パワー重視 操作しやすい

イタリア製 ：スピード重視 操作しやすい

なんか、車みたいだな…どこか国民性も出てる気がする。

見た目はどれも同じだから、まずは、基本の日本製にしよう。

いずれ、他のものも手に入れられるようになるんだろう。

ゲームとはそんなものだ。

選ぶのは、どうやらこれだけのようだ。

今から、キャラメイクだ。

キャラメイクは、ゲームの大きな楽しみのひとつだが、今は、時間が惜しいから、この楽しみは2キャラ目以降にとっておこう。

俺は、自分をコピーという項目を選び、すぐにスタートした、

目の前はまた、真っ暗になる。

あ：目が開けられるぞ。

それに何か匂う…：海の香りだ。

波の音も聞こえる。

そうか、ここが始まりの場所なんだな。

辺りには、砂浜が広がっている。海には島も見えない。振り向くと、西洋の城のようなものがある。

ここに行くんだな。

自分を見てみると、服は村人みたいだ。

防具などがないという事は、おそらくこの城で揃えるんだろう。

歩くと、しっかりと足には砂浜を歩いている感覚がある。

太陽の熱も感じる。肌をなでる風も…

すごい、本当に島にいるのと同じだ。

手足にも違和感はない。

あっそうだ、ゲームといえば……ふと思い浮かべる。

すると、出てきた。

ステータスだ。

樹

Lv : 1

HP : 20

MP : 5

これだけ？

そうか、得意技もまだ何も覚えてないって事だな。

でも、MPって……魔法が使えるのか？

まあ、いいや。

とりあえず、城に行こう。

門には門番がいる。

NPCかな？話しかけておこう。

「どーも」

「初めまして、イツキ様、ご当選おめでとございます」

「あ、どうも…入っていいですか？」

「もちろん、どうぞ」

「じゃあ…」

俺は一度門の中に入ったが、少しきになる事を聞いてみることにした。

「…あの……門番さん、聞いてもいいですか？」

「ええ、なんででしょう?」

「あなたは……普通に話してますけど……コンピューターの方ですか?」

「あ、私は「ギル2」の職員です。NPCじゃなく、人間ですよ。」

「このプレイヤー以外のキャラは全て、生の人間がやっていますので」

「ああ、そうなんですわね……大変ですわね」

「あはは、ありがとうございます。」

私も、まさか自分がこの時代に、門番の仕事をするとは夢にも思いませんでしたよ。

まあ、イツキ様も、しがない門番に関わらずに、最高のゲームライフを楽しんでください」

「しがないのか……門番は。」

「ありがとうございます。……あの、もし分からない事とかあったら、相談してもいいですか?」

「もちろんです」

「良かった、では行ってきます」

「いつてらしゃいませ、イツキ様」

ああ、人間か……NPCと闘えるかどうか、いきなり殴りかかって試さないで良かった。

城の中に入ると、広い街があつて、石やレンガ、木で出来た建物が立っている。

そして、大勢の人がいた。

チエイサーらしき人や、商人風の人、医者もいるみたいだ。

武器屋や防具屋、酒場もある。

どうやら、基本は中世の雰囲気のような。

皆の服装は、結構バラバラだな。

騎士っぽいのもあれば、近未来っぽいのもいるし、侍や、亜人もいる。

なんでもありみたいだな。

しかし、どこに行けばいいんだろう。

やっぱり、誰かに聞くしかないか……どの世界も、コミュニケーションは必要みたいだな。

誰に聞こうか……あれ……？……あそこの人……なにやってるんだ？

暗い路地の奥に、三人の人がもめてるみたいだ。

一人は女の子だぞ……どうやらイベント発生っぽいな！

おいおい、こっちは何年ゲームやってると思ってるんだよ！

俺は、急いで路地に飛び込んだ。

「おい、あんたら、そこで何してんだよ？」

「うち……人が来やがった。」

……ん？……なんだよ、お前も初心者か……お前はいいから、あっち行つてろ」

二人の男のステータス見ると、Lv10だった。

でも、女の子はLv1だ。

なんだ？イベントじゃないのか？

女の子は、嫌がつてるぞ。

「あの……はなしてください……私は……一人です……」

ははくん……どうやら、この男どもは、女の子を無理やりパーティーに入れようとしてるんだな？

まあイベントじゃないなら、はつきり言って無視したっていいんだけど、その前に……俺は男だからな。

ゲームの中だし、ちよつと大胆になっちゃおう！

「なあ、その子嫌がつてるように見えるけど？」

「おい、うるせえよ、早く王様に会いに行つてこいよ、ペーパーが」
女の子の手を掴んでいる男の、後ろにいる男が、剣に手をかけている。

……ヤバい……もしかしたら、プレイヤー同士も戦えるのかもなあ。

今の俺が戦ってもLv10の奴に勝てるワケないし……

うーん……どうしよつか……

そうだ！

よし！

俺は、路地を走って出た。

そして、入ってきた門に急ぐ。

いた！

「……門番さん！」

「どうも、イツキ様」

「助けてください、女の子が襲われています！」

「え!? それは大変だ！わかりました、案内してください！」

俺は門番を連れて、路地裏に急いだ。

三人は、まだもめている。

「門番さん！あれです！」

「その二人！規則違反ですよ！」

門番は男達に駆け寄る。

「やっべー！行くぞー！」

「…あつ、待ちなさい！」

男達は、路地裏の奥に逃げていき、門番も追いかけて行った。

女の子は、疲れたようで壁にもたれかかる。

肩まで伸びたピンク色の髪、村娘の服も似合ってるな。

見た感じ、同じ年くらいで小動物系の甘い顔だ。

左の口の上に、小さなホクロがある。

なんか、いいなあ。

「あの、大丈夫ですか？」

「……ええ、あの…助けてくれてありがとうございます」

「いえ…あの、これ…イベントとか…」

「イベント？」

「あ…じゃないですね、あの初心者の方ですか？」

「そうです、私イノリって言います」

「俺は、イツキです、よろしく」

「こちらこそ…あの、もしかして来たばかりですか？」

「そうです、どこに行けば良いかわかんなくって…」

「あつ、おんなじですね…クスツ」

「あは…はは」

「わかんなくて、誰かに聞こうとモタモタしてたら、さっきの人たちに連れてかれちゃって…」

これは、チャンスですよ。

ロマンスの神様！

「そうなんですか…あの、イノリさん…良かったら初心者同士、一緒に探しませんか？初めに行くところ？」

「ええ、ぜひお願いします…イツキさん」

「やった」

「クスツ、なんか、敬語つてのも変な感じだから、イノリでいいですよ」

「じゃあ、俺も、イツキで…敬語もなしで、いい？」

「うん、イツキ」

「ハハ…なんか照れるね、じゃ行こうか、イノリ」

俺の滑り出し、エロゲー並みにいい感じだ。

どうか、ネカマじゃありませんよーに。

城2

路地裏を出て、明るい場所で俺達は話し合った。

「さつき、イノリを捕まえてた奴らが、初心者様は王様のところに行けて、

言っただけで、おそらく城に行くといいじゃないかな？」

「そうだね、ゲームの王道だもんね、行ってみようよ」

俺達は、街の中心に見えている城に向かう事にした。

石畳の上を歩いてみると、海外にいるような気持ちになる。

出会ったばかりの女の子（でありますように…）と並んで綺麗な街を歩くなんて、

なんか、俺、Lvが上がった気がします！

でも、意識せずに、自然に歩こう。

空も見よう。

「イツキって、ゲームはよくするの？」

「ああ、大好きだよ…おおげさじゃなくて、ゲームの為に今は生きてるかな」

「そうなんだ！私もゲーム大好き！ゲームって、リアルと違って夢があるよね！

なんか、友達とかにゲームやってるって言うと、オタクだーとか、暗いとか言われるけど、

なんなんだろうね？現実より、絶対こっちの方が面白いのに…」

「ま、いいんじゃない？わからない人は、気にしないでさ…俺達が楽しめるればいいよ」

俺は、すこぶる楽しいっす！

「そうだね…せっかく、夢の「ギル2」に参加できたんだもん！楽しみなきやバチが当たるよね！」

「ああ」

良かった…イノリは結構、普通のやつみたいだ、素直そうだし。

VRMMOって変な奴も多いから、ソロプレーの方が性に合ってた

けど、

こんな感じの奴となら、一緒にいても害は少なそうだな。

さっきの男達みたいに、マナーの悪いのもいるって事は、やっぱり厳しい審査も万能じゃないって事だろうし。

システムに慣れるまでは、複数でプレイした方が、レベル上げも楽だし、情報も入って来そうだしな。

ちよつと持ちかけてみるか？

「イノリ…」

「なに？」

「良かったらさ、しばらく一緒にプレイしないか？」

「一緒に？」

「ああ…さっきの奴らに、イノリは一人でプレイする、って言ってたのを聞いたんだけどさ、俺らまだ、Lv1だろ？」

もう少し成長するまでは、二人とかの方が効率いいかなって…もちろん、断ってくれてもいいけど、どうか な？」

イノリは、手をアゴの下に当てて少し考えている。

言うの早すぎたかな？

でも、こういうのは、思った時に言っておかないと、なんか色々考え過ぎて、言えなくなっちゃうんだよな。

特に俺なんか、考え過ぎてしまうタイプだからな。

まあ…ダメモトだし、断られたっていいんだけど。

別に告白してるわけじゃないんだから、全然いいんだけど。

さつき会ったばかりで、急に好きになるワケないんだから、別にいいんだけど。

見た感じは可愛いし、今の所は女の子っぽいけど、ネカマの可能性もあるから、断られたって別にいいんだけど。

キャラメイクで、髪がピンクっていうのは、少しなんで？って思うけど、まあ似合って…

「はいよー」

「えっ…マジで？」

「うん…最初は私もソロプレイ派だから、一人でって思ってたけど、イ

ツキみたいな感じの人となら、うまくやれるかも」

「良かった…断られたら、どうしようって思ってたよ…ハハ」

「うん、ごめんね！私ちよつと考え過ぎなところあるから」

「いや、俺も」

「クスッ」

イノリが笑ってる。

ゲームだってわかってるけど、なんか嬉しくなるな。

現実でも、俺がこのくらい自然に自分を出せたら、もっと楽になるのかな？

つつつても、実際はそうもいかないもんなあ…

なんでだろ……って、イカンイカン。

また余計な事を考えてる。

素直に楽しもうっと！

俺達は城について、中に入っただけでしばらく歩き、玉座の間について大きな扉を開けると、王様の姿をした人がパソコンでなんかしてる。

「イツキ…あの人かな？」

「た…ぶんな…なんかイメージと会ってないけど」

入り口で、コソコソ話している俺達に気づいて、王様が大声を出す。

「あ…初めての方ですよね？……どうぞこちらへ！」

おお…王様っぼさナシか。

俺達は言われるまま王様の前に行った。

近づくと、王様は明らかになつて髭をした、女の人だ。

なんだ？

「どーも、ようこそ「ギルティ&ギルド」の世界へ、わしが王様じゃ…お前達は勇者としてこれか…ぶん…あれ？…え…と…」

王様は、画面を見ながら棒読みで言い、おそろくセリフを見失ったんだろう。

なんだよ、運営はどうなってるんだよ………つたく…

「あの…別にいいっすよ…俺達が今から何をすればいいかだけ、教えてもらえれば…」

「……そう？ 済みませんね！ ちょっと本職の人が急に病欠になっちゃって、あたし初めてこれやらされたんですよ？」

ひどいでしょ？ ってのは、関係ないですね…汗汗…」

汗って…

「えっと、なんか二人とも賢そうなんで、細かい設定は、はしよりますね！」

あの……察してください！

えー私は、いつもは事務職してます、レイナって言います。

知ってると思いますけど、二人にはこれから、罪人をやつつけてもらいます。

もし死んだら、月に3回までは生き返れます。

4回目死ぬと、来月まで復活できませんので、気をつけてください。

場所は、街の教会に行きますので、よろしく。

あと、街にある酒場の中にギルドがありますから、仲間とか情報はそこで、どうぞ。

あと……なんか、ありますか？」

なんかありますって……てきとーだな、この人。

それに、喋ってるヒゲが取れるみたいで、何度も付け直してる。

世界観……どうした…

イノリが、質問をする。

「あの、経験値とかお金とかは、どうなるんですか？」

「ああ…ステータスは、見ました？」

「ええ」

「同じです。おかねーって考えてもらえれば、出ますから」

「ああ…そうなんですな」

「物を買いたい時も、お店の人に買いたいって思えば、払えますから」

「はあ…」

「そして、今二人には3万ルギあげましたので、これで初めの装備を揃えてください……」

あつ、あとコレは重要、ここは『ギルティア』って言う街なんです
が、ここには罪人はいなくて、

罪人のいる『シユラ』までは、船で行きます。

船は、二時間に一回港から出てますから、時間配分を間違えないように。

あと、船も直接『シユラ』には着岸しません。

罪人が船に乗ってくると、危険ですからね。

皆さんは、船で近くまで行って、空を飛んでから『シユラ』に行ってください」

「飛ぶ!?!」

俺達は驚いた。

「ええ、魔法っていう設定で飛べるようになってます。

ただ、これは行き帰り用になりますので、それ以外では使えません」

イノリが目を輝かせてる。

「魔法で飛べるんだって! イツキ! すごくない!?!」

「すげーな…:それだけでも、かなり価値ありそうだよね」

「え〜…:そんなところかな?」

あの、もしなんかわかんなければ、いつでも来てください。

もうすぐ、シフトで次の王様が来るので、そっちの方が詳しいと思いますよ」

「あ、はい…:イノリなんか聞いとく事ない?」

「うん、とりあえずは」

このレイナに聞いても、仕方なさそうだしな、また気になれば今度来よう。

「レイナさん、ありがとうございました」

「あ、すいませんね…:なんか適当で…:」

お詫びと言ってはなんですけど、二人とも千ルギだけ、サービスしときますね」

「ああ、どーも、では」

俺達は、城をあとにする。

酒場

城を出て、王様 兼 事務職のレイナさん（なんだそりや）に言われた通り、俺達は酒場にあるギルドに向かった。

鉄と木で作られた無骨な建物で、天井も高く、広さもかなりある。イノリも酒場の意外な大きさに驚いている。

「すごい：：こんなに広いんだね：：なんかイメージでは居酒屋みたいな小さいとこだと思ってたよ」

「確かに広いな：：うちの学校の体育館くらいはあるだろうな：：」

俺の言葉にイノリが反応する。

「うちの学校：：イツキって、学生なんだ」

「ああ：：まあ隠すような事でもないから、言うけど：：俺は高校生だよ」

「わあ：：おんなじだよ！ 私も：：：高校生なの」

やりに！

「へえ：：見かけた時に、同い年くらいかなって思ってたんだけど、やっぱりそうだったんだな」

「うん：：なんか、見た目はそのままで行こうって決めてたから、変えなかつたんだ」

「ハハ：：それもおんなじ」

「クスッ：：気が合うかもね」

「だな」

ちよーい感じじゃん！

ホクロが口元にあるから、そうじゃないかってピンときてたけど、なんかキモがられると嫌だから、

言わないでおこう。

舞い上がっても、冷静な俺だ。

好きだぞ、俺。

「イツキ、あそこがギルドのカウンターだよ、行ってみよ」

イノリは俺の腕を掴んで、ギルドカウンターに引っ張っていく。

早くもボデイタッチ発生！

フォトシヨ機能は……ないか。

カウンターでは、うさぎの耳をつけて金髪のくるくるヘアの女の子が、対応してくれた。

「ルーキーさんですね！どーも、ギルドの受付嬢、アヒルです」
うさぎだろ…

イノリは、うさ耳に見とれてる。

「あの一…うさ…アヒルさん、俺達はまず何をしたら…」

「えっと、先にここに名前を書いてください。

その後、コレを渡しておきますので、読んで項目を決めて○をつけたら、また来てくださいね。」

うさ…アヒルは、簡単な説明が載っている紙をくれた。……ややこしい。

俺達は、名前を書いた後、酒場のテーブルに座ると、今度は猫耳をつけたロールヘアのメイドがコーヒーとケーキを持ってきた。

「どうぞ！当店「朱美No2」よりルーキーさんへのサービスだニヤ！」

なんだその名前…

イノリは気にせず喜んでる。

「わあ…どうも、ありがとうございます！」

「頑張ってくださいニヤ！稼いだら、ここで祝いしてニヤ！」
そうするニヤ！

恥ずかしさはないのかニヤ？

仕事が終わったら、深いため息をつくんだらうニヤ！

俺は、説明書に目を通す。

ギルドでは、様々な情報を提供しています。

登録しているメンバーなら、パーティーに紹介できます
初めの武器をプレゼントします

○剣 ○斧 ○槍 ○ハンマー ○短剣

職業が選べます

・セイバー（武器の攻撃力が2倍）

- ・アーマー（防具の防御力が2倍）
- ・モンク（速さ、素手の攻撃力が2倍）
- ・ヒーラー（道具使用効果が2倍）

一言メモ：装備は死んだら罪人に取られてしまいますので、死なないでね

詳しくは、受付嬢まで！

なるほど、初期のジョブは4種類か。

Lvに応じて増えていくタイプだな。

魔法使い系は、あとからか…。

装備がなくなるって事は…最初は金も少ないから、これがポイントになりそうだ。

「イツキ…死んだら装備なくなっちゃうんだね…」

「そうみたいだな…じゃあ、毎回揃え直さなきゃいけないのか…簡単には死ねないって事だな」

「だね…ああ私、職業なんにしようかな…？」

「やっぱり、無難にセイバーかなあ」

「でも、装備の事を考えると、モンクもありって事だよ」

「ヒーラーだと、パーティーに有利かもね…あく…ん…悩んじゃうなあ…」

確かに、悩ましい。

だが、これがゲームの醍醐味だ。

嬉しい悩み。

現実では、滅多にないんだよなあ。

現実の悩みは、本当に苦しい事、面倒な事ばっかなんだ。

同じ悩みなのに、なんでこうも違うんだろう。

「ねえ…イツキ…どうする？」

「ん？…ああ、ごめん…他の事考えてた」

「そうなんだ…あのさあ、ちよつと思っただけど…」

「何？」

「さっき、しばらく一緒にいようって言ったでしょ？」

あれって、二人でパーティーを組もうって事なんだよね？」

「ああ…その方が早めに強くなれると思わない？」

「だよね！……じゃあ、あたしヒーラーにしようかな？」

そしたら、イツキが何を選んでもサポートできるし、パーティーっぽくない？」

「そうだけど……いいの？別に、セイバーが二人だって戦えないワケじゃないぜ？」

好きなの選んでいいよ？」

「ううん、あたしヒーラーになるよ！誰かを助けるの、素敵だしね！」

「そうか……じゃあ俺は、無難にセイバーにしておくよ。」

まずは、普通の味つてのが、俺のやり方だから。

きつと、またLvが上がれば、新しいジョブも増えるだろうしな」

「決まりだね！……ねえ武器は何にする？」

「俺は、無難だから剣にするよ」

「じゃあ、私は援護用で、リーチの長い槍にしよう！」

楽しいね！なんかワクワクしてきちゃった！」

「ああ、俺も！よし……とりあえずは、決まったからカウンターに行こう」

二人でカウンターに向かった。

アヒルが受付してくれる。

「決まりましたね！では、まず剣と槍をお渡ししますね。」

それと、お二人はパーティーを組まれるんですか？」

イノリは俺を見てうなずく。

可愛いな、コイツ……なんか、小動物系だからか知らないが、抱きしめたくなくてきたぞ。

ただの性衝動か……？」

……あとにしよう。

「…はい、まずは二人でやってみようと思います」

「わかりました、パーティーの名前とか決めてますか？」

あ、それも決められるのか。

イノリを見ると、首をかしげている。

「それって……後でも決められますか？」

「はい、ではひとまず二人の名前、『イツキとイノリ』にしておきますね」

フオーク歌手みたいになつたな……

「では、軽く説明をしますね。

これからは、何をしても構いません。

戦いに行くのなら、防具と道具をお店で揃えてください。

船は、港から出てますので……お城の南側です。

ただ、お二人はまだルーキーさんなので、道場で戦い方を教わる事をお勧めします。

場所は、街の中に看板がでてますので、その通りにどうぞ。

あくまで、自由参加となっております。

何か質問はありますか？」

イノリと目を合わせると、首を横に振ってる。

「とりあえず、大丈夫です」

「では、がんばって罪人をたくさん処刑してください……あつ、ピョン！」

最後だけ、キャラ守ったのか……つか、ガァーって言えよ、アヒル。

太らして肝臓とり出したるか。

ん？別の鳥か？

俺達は武器を抱え、ひとまず街へ出た。

今言える事は、俺の戦いは、まだ始まらない……

道場

俺はイノリと二人で、とりあえず道場に向かった。

道場に着くと、外観は道場というより、小さな闘技場という感じだ。とりあえず、木の扉をノックする。

「……すみませーん、ギルドで聞いてきましたー」

すると、奥から声が聞こえた。

「……どーじよー」

うわあ…

「……イノリ…やめとく?」

「なんで?」

「いやな予感しますよ?」

「だいじよーぶでしよ、戦い方は知っておきたいし。入ろうよ?」
「…」

俺は、しぶしぶ扉を開けて、道場の中に入った。

受付と休憩所のようなものがあるが、誰もいない。

突き当たりのドアが開いていて、中庭があり、そこに男の人が立って手招きしている。

俺達は、中庭に入り男のところまで行った。

男は、痩せた40代くらいのオジさんだ。

見た目は、エセ貴族のような格好をしている。

カボチャみたいいなズボンをはいて、白のタイツに、カラフルなラメの入った色のシャツ。

鼻の下のヒゲは漫画のようにスーツと横に伸び、先がくるくると丸くなっている。

えーと…どうやったら、そういうヒゲになるかを聞きにきたんだっけ?

そう考えていると、男が勝手にしゃべりだした。

「わたくしが師範のプースで…あーる」

ああ、間違いなくさつき言葉は、こいつが言ってたな。

名前も適当だ。

ぜつつたいに、『師範』という肩書きを先にもらつて、名前を考えたんだろう。

名前つて、世界観を作るのに、重要な要素のひとつのはずだろ？

そーいや、さっきのアヒルといい、こいつといい、どうやらこの運営は、世界観作りは下手だな。

スタッフの育成も。

語尾に何かをつければ、キャラが完成するとおもつてんのか？

本当にこいつから、何かを学ぶのかよ？

とりあえず、挨拶はしとくか……

「ああ……どうも、イツキとこつちが、イノリです」

「はい、戦い方を教えます……お二人の武器を構えてください」

ほら……「あーる」もう出ねえ……

そこから、俺達は一通り剣と槍の使い方を、市販の……師範のプー
スに習った。

一応、まともに剣で相手をしてくれた。

「お二人とも、筋がよろしいようです。少し休憩をしましょう。」

そちらの休憩室へ、「どーじょー」

ほう……こつちが出たか……

俺達は、椅子に座つて休憩をする。

「お茶を、どーじょー」

ほう……

使いやすいようだな……

お茶を飲んでいると、プースがなまいきにも、イノリに話しかける。

「どうですか？イノリさん、……戦えそうですか？」

「うん……まだわかんないです……でも意外と槍つて軽いんですね？」

「いえ、そんな事はありません。それは、ボディ（肉体）の補正が入つ
てるので、実際より軽く感じるんです」

「ボディの補正？」

「ええ、本当の重さでは、普通の人は疲れてしまいますからね。」

少しだけ、バランスをボディが調整しているという事です。

お二人が使用しているボディは、本当は凄く優秀なものなんです。しかし、まだお二人はLvが低いので、ボディ自体の力をシステムで制御しております。

強くなれば、その制御、リミッターのようなものが解除されていき、本来の性能が出るという事です」

そうか、なるほど…：そういう風にして、Lvや強さのバランスを取ってるんだな。

ジョブもそうか…：本当はもっと力を出せるけど、

セイバーなら武器使用時に力を少し解除、

アーマーなら、耐久性を少し解除してるって事か…

その辺は、ちゃんとしてるじゃん。

あ、っそういえば…

「あのプースさん、俺たちまだ、HPが20くらいしかないんですけど、これってどのくらいの攻撃で死んじゃうんですか？」

「ビンタされたら死にます」

「ビンタで!?!」

「はい」

「ええ…」

「転んでも死にます」

「…」

「靴ズレでも死にます。」

口内炎でも死にます。

急に横向いて、首がピキってなっても死にます。

友達になろうって言って、断られても死にます」

…俺…：さっきヤバかったじゃん…

「では、そろそろ実践といきましょうか？」

「実践？」

俺達は中庭に出た。

「えー、今から敵が出てきますので、お二人で倒してください」
敵？

闘技場のドアが全て閉じられると、ひとつの鉄格子の柵が上がっ

て、中から何か走り出てきた。

嘘だろ…ゾンビだ！

「キヤー!!」

イノリは叫びながら、走って逃げ出す。

マジか!?!いきなりバケモンが相手かよ！

いや…待て…俺！

やれるはずだ!……ビビんな！

ゾンビなんて、映画やドラマで、倒し方は何度もシユミレートしてきてる！

車庫や、納屋でエツちな事さえしなければ、簡単にやられる事はない！

こいつらの弱点は、ここだ！

俺は剣で頭を切りつけた。

ゾンビの頭は、中身と一緒に飛び散り、体を痙攣させながら倒れた。タカラツカトツタッター！

急に頭に音楽が響いた。

あつLvアップか！

ステータス…は、

Lv：2

HP：35

MP：10

特技：脳出し

うーん…ことごとく…ネームセンス…

まあいい、とりあえずLvアップしたし、特技も覚えた！

「イツキさん、おめでとうございます！

素晴らしかったですよ！

まだまだ、出てきますからね、油断しないように！」

どうやら、ここで少しだけLvが上げられるんだな。

「イツキ…私、ムリ〜」

イノリは、端っこでしゃがんで、頭を抱えている。

「イノリー、Lvがここでも上がるみたいだから、やつといた方がいい

ぞ?」

「うくん……そう……なの……?」

「靴ズレする前に、やっところうぜ?」

「う……」

その後、俺達はなんとかゾンビを全滅させて、お互いLv5まで成長する事が出来た。

そして、俺達は道場を後にした。

ついに「……あーる」は、一度しか出なかつた。

防具屋

道場を出た俺達は、防具屋に向かう事にした。

「ねえ、イツキ…さっきのゾンビだけど、あれって本物っぽくなかった？」

「確かに…俺もビックリした。もしかしたら「シユラ」には罪人以外にも、モンスターがいるのかもね」

ネットにある「ギル2」の動画には、罪人と戦うチェイサーしか見た事はない。

でもゾンビは、CGでも、誰かが演じているワケでもなさそうだった。

ただ、現実が存在する『シユラ』の世界が舞台の「ギル2」だから、ファンタジー要素は少ないと思ってたんだけど…そうでもないのか。

「えくあたしちよつと苦手だな…スライムくらいだったらいいけど」

「そうだな…ただ罪人は武器を持つてるから、かなり手強いけど、ゾンビとかだと武器を持つ俺達の方が有利になるから、Lv上げにはちようど良いかもな」

「…そうかもだけど…うー、なんかまだヌルつとした感触が残ってる気がする…」

そんな事を言いながら、俺達は防具屋に着いた。

防具屋の中は、洋服屋のようになっていた。

「わあ…イツキ、なんか『ウニクロ』みたいだね」

「そうだな、色んな種類があるな…俺は、まずはノーマルでいきたいから、

この青い皮の鎧にしようかな…」

「あ、いいね。」

じゃあ私も、この赤っぽい皮の鎧にするよ」

皮の鎧は、肩当てと小手がセットになっていて、3,000ルギだった

た。

これが死んだらなくなるって言うってたな…鎧の相場がこのくらいだったら、剣も1,000ルギ位だろう。

初期の金が3万ルギだったから、道具を1000ルギ位買えば、

まあ…死んでも減るのは5,000ルギ位、と見積れるな。

死んでも金が半分になるとかは、言うてなかったから、減るのはこの金額しかないだろう。

って事は初めに少し死んでも、装備が揃えられなくなる心配は、ないな。

「イツキ、盾もあるけど買わなくていい?」

「盾か…そうだな、二人のパーティーだから俺が簡単にやられちゃ、意味ないもんな。

せつかく、イノリがヒーラーになってサポートしてくれるんだったら、盾はあった方がいいか」

「ほら、このタワーシールドだったら鉄壁…う…重い…これ私、全然持てないよ…」

「イノリ、それはたぶんアーマーだったら軽く感じるようになってるんだよ。

だから、俺達はこっちのバックラーとか、カイトシールドとかを装備するんだ」

「そうなんだ…やっぱりアーマーなら攻撃を受けても、かなり耐えられるそうだね」

「ああ、でもアーマーは重い分スピードは落ちるだろうし、それぞれ一長一短だよ」

「そっか…で、どうするの、盾?」

「イツキが買うなら私も買うけど」

「そうだな…買っておこう。」

罪人の攻撃は武器になるから、盾があると便利だろうし…まずはこの皮のバックラーだな」

「わかった…あ、こっちには兜があるよ?」

「ああ…俺は兜はいらないよ」

「そうなの？」

「見た目が、少しやぼったくなる気がして、他のゲームでも、あまりかぶらないんだ」

「そうなんだ、見た目は確かに重要だよね」

「うん」

見た目。

ゲームでも、現実でも、見た目は重要だ。

特に俺みたいなゲーム好きは、よく現実の姿がヤバい事が多い。

人間は、見た目が何割とかって言うのを聞いた事がある。

なのに、何かに没頭すると、人は見た目なんてどうでもよくなる事がある。

だが、俺は高校生だ。

見た目を気にしないで生きる事ができる社会に、生きていない。

高校生は、バカだから見た目が大きな影響力を持つ。

以前にも言ったが、俺は無駄に目立つのは嫌いなんだ。

見た目がゼロ、またはマイナスだと、どうしても逆に目立ってしまう。

そうになると、不思議とキャラも勝手に決められてしまうんだ。

ゲーム好き⇨オタク⇨ダサイ⇨ドーター

この負の連鎖が、自分をどんどん下げていってしまっただ。

実際は、全部当たっているのだが：

それを見破られてしまうのは、負ける事と同じだ。

どこかで、この下げコンボを止めなければならぬ。

どこで止めるか？

ゲーム好きは、止まらない。

アイデンティティだ。

オタクも、止まらない。

性だ。

ドーターは、止まらない。

相手が必要だ。

ダサいは、止まる。

ここが最後の砦だ。

俺は、オシヤレではない。

興味もない。

だが、服は選ぶ。

ここで間違えてはいけない事は、オシヤレになろうとする事と、自己主張をする事だ。

これは、選ばれた者のみが手に出来る、スキルだ。

興味もないのに、これに手を出そうとするから、人は失敗をしていく。

俺はそうはならない。

俺が選ぶのは、オシヤレなものじゃなくて、目立たず無難なもの、サイズのあったもの、だ。

これだけで、いいのだ。

これだけで、コンボは防げる。

「ドーターのゲーム好き」：ではなく…「普通の奴でゲーム好き」：に、クラスチェンジするんだ。

異性は、「普通」の見た目なら、ある程度は受け入れてくれるのだ。深く踏み込めば、痛い奴だった…でも、その頃には耐性がついてきてるものだ。

だから、なんとかなる。

強引にいつても、許される可能性が増える。

人參を、ヘタの方から入れても小さな穴には入らないが、細くなつた方から入れれば入る…

ちよつと待て…

俺は、何を考えているんだ……？

イノリが俺を見ている。

「イノリ、兜はいらない」

「うん……さつき聞いたよ」

ああ……それだけで、良かったな。
俺達は防具屋を出た。

ぶかつ

防具屋を出ると、空は暗くなりかけていた。

「ああ、もう夜になってる…イツキ、あたしもうログアウトしなきゃ」「そうか、俺もだよ…現実の生活もしなきゃいけないよな。

今日は、シユラに行けなかったね」

「うん、でも十分楽しかったよ」

「そうだね、イノリは明日もログインするの?」

「明日は夕方から用事があって入れないんだ。

明後日は、土曜日だから午前中からやりたいな」

「そつか…:じゃあ俺も合わせるよ」

「え?!そんなの悪いよ…」

「いいよ、俺も最初の『シユラ』はじっくり楽しみたいし…:だったら学校もない土曜がいいからさ」

「ほんと?!じゃあ、土曜日の10時に酒場『明美N02』で待ち合わせとか…:いいかな?」

イノリは、顔を少し赤くして、少し上目遣いで俺を見てくる。

「なんだか照れているみたいだな。

「待ち合わせ」っていうのが、何かくすぐったいのかも。

俺もですよ、イノリさん!

男子高校生には、『待ち合わせ』って言葉で、2回分はできちゃいますからね!

『男子の半分は、妄想でできてます』って、どっかの製薬会社も言ってますから!

でも、そんな事は少しも感じさせずに、俺はクールに…

「もちろんOK…:楽しみにしてるよ」

「うん…:私も!」

えっと、ログアウトは街中だったらどこでも出来るみたいだから、ここでお別れしよつか?」

「そうだな、今日はありがとう、イノリ」

「ごちらこそ…それに、助けてくれて、ありがとね、イツキ」

「いいって…じゃあ土曜の10時に」

「うん、じゃあね」

イノリは手を振りながら、小さな光の粒になって消えていった。

俺もパラメータを開き、ログアウトを指定した。

スーツと空に登る感覚の後に、自分が横になっている感覚が戻ってきた。

俺は、ブレインリンクを外して、ベッドの枕に顔をうずめる。

「オツツシャー!!」

いきなり可愛い子と、パーティーが組めました!

しかも、女子高生との話です!

待ち合わせもして、ちよつと照れちゃってました!

イ・ノ・リ!

イ・ノ・リ!

イノリを応援した後、俺は時計を見る。

今の時間は、7時4分か…そろそろ、夕飯の時間だと母さんが呼びに来るだろう…

いや…10分くらいは、時間あるかな…

俺は部屋のドアの内鍵を、そつとかけた。

俺は少し興奮しているようだ…仕方ない。

数分だけバーサーカーになろう。

でないど、舌に血がかよわずに、下に血がたまつたままで、

ご飯の味がわからないからな。

▪

次の日の学校。

昼休み。

いつものように、机につつぷして昼寝をしていると、

「イツキー、寝てるの?」

蘭子の声だ。

ああ、俺は寝てる。

見たらわかるだろ?

なのになぜ聞く?...蘭子よ。

あれか?寝てるのは俺の魂だけで、体は起きてフリーズでもして
るっていいのか?

いや、だとしたら、「イツキ、どうしたの?」となるはずだ。

では、なぜ?

なぜ、こいつは寝ている相手に向かって、寝ているのか確認をする
んだ?

どうする?...起きて問い詰めてみるか?

そうすると、こいつが言うことは「いや...寝てるのかと思って...」
らしいものだ。

予想はついてる。

そうだ、分かってるよ...蘭子。

理由なんかないんだろ。

俺が寝ていようが、蘭子は自分が話しかけたい時は、一度声をかけ
て起こすんだ。

蘭子とは、そういう奴であり、また女とはそんなものだ。

もちろん、女全員がそうだという乱暴な議論をするつもりはない。

ただ、そういう.....

ちよつと待て...今はやめとこう。

「.....なんだよ、蘭子?」

しかたなく、起きて机に肘をつく。

「なんだ、起きてたんだ」

「お前が起こしたんだろ?」

「へへへ...あのさ、イツキは部活とか入んないの?」

蘭子は、今は教室にいないカズチカの席に座って、おれの机に両肘
をつき、

小さな顔を支える。

少しつり気味の大きな目が、楽しそうに光ってる。

「部活?入らないよ...俺がゲーム好きなの知ってるだろ?」

部活なんて入ったらゲームする時間がなくなるじゃん」

「知ってるけど、せつかく高校性になったんだから、青春とかした方が

「良くない？」

ふっ：安易だな、蘭子。

お前らしいよ。

部活Ⅱ青春

その方程式：いや、方程式にもなっていない、二段階の思考。

あれと一緒にだな。

自分の子供を、グローバルに活躍できる子供にしたい。

だから、英語を学ばせます。

いや、英語ができたって、グローバルな人にはなれませんから。

じゃあ、英語が母国語の国の人は、全員グローバルな人なんですか

？

違いますよ。

自分の国の言葉や文化を、しっかりと身につけた人でなければ、他の人は興味を持ちません。

だから、まずは国語なんですよ。

蘭子。

「国語……いや、蘭子……部活に入れば、青春が出来るわけじゃないだろ？」

「国語？……いや、そうじゃないけど、やっぱり青春って言ったら、部活でしょ？」

「知らん……っつーか、お前がどこかの部活に入りたいんだろ？」

「イエス！アイドゥ！」

「入りやいいじゃん」

「んくもう……だつて一人で行くのは恥ずいんだもん！色々巡りたいから……イツキも付き合つてよ」

「はあく？……そんなのお祭り男のカズチカに頼めよ」

「ヤダー！あいつは調子がいいから、一つ目の部活で入ります！つて言つちやうでしょ？」

「ああ、そうなりそうだ。蘭子でも先の事を予想できるんだな」

「やな感じ……ねえ、いいじゃんイツキ」

蘭子は上目遣いで、俺を下から覗き込む。

そのせいで、蘭子の胸元が開き、夢の谷間と桃色の魔法の布が目に見え、飛び込んできた。

ヤバイ！視線が動いたのを見られたらどうだろうか？

俺は体を机から少し離す。

蘭子を見ると、少し不思議そうな顔をしている。

どうやら、バレなかったようだ。

俺はまだ、エロに対する良い対処法を会得していない。

だから、こういう事はできるだけ、避けるしかない状態だ。

クールでいられないのだ。

キャラが定まっていない。

しかし、貰ったものには、お返しをしなきゃな。

仕方ない……

「わかったよ、付き合ってたよ」

「やった！」

蘭子は、手を胸の前で小さく叩いた。

「でも、付き合うだけだ。俺は入ったりしないからな」

「まあ、それは行ってから考えよ？」

じゃ、今日の放課後ね」

そう言っつて、席を立ち上がって振り向いた蘭子の、スカートの裾が、

ゆっくりと回転しながら上昇していく。

ああ…これは、きっと神様がいい事をしたと、微笑んでくれている

のだろう。

俺は、この瞬間を何度も再生できるように、全ての感覚を視覚に集

中させる。

……桃色……

俺は、今夜も立派なバーサーカーになれる。

本

その日の放課後、俺は蘭子と二人で約束した部活巡りをやっていた。

「演劇部も吹奏楽部も、なんかイマイチだったなあ…樹はどう思った？」

「…うーん…よくわかんないよ。俺は部活なんて入った事ないし。」

「つか、蘭子は運動部は見ないのか？」

「うーん…なんかさあ、運動部って意外と上下関係が厳しそうじゃない？」

「まあな。」

でも、それなりの人数が集まれば、統率をとる為におのずとそうなるんだろ。

それに、文化部だって、先輩後輩の関係はあるよ」

「あたしは、嫌だなく。たいした能力もないのに、ほんの数年前に生まれてっただけで、

偉そうにされるのは、ちよつと抵抗あるなあ」

「まあ、わからなくはないけど…でも、部活なら絶対に先輩はいるんだ。自分で立ち上げない限りな」

「自分で…？？」

そう言いながら、廊下にある部活案内の掲示板を見ていた俺達の後ろで、バタバタと何かが落ちる音がした。

振り向くと、大量の本が廊下に散らばっている。

そこには、底の抜けた段ボール箱を持って、女の子が立っていた。薄いミルクテイ色の肩まである髪に、丸くて分厚いメガネをかけている。

女の子はアワアワとなり、急いで本を集めだす。

俺と蘭子も、手伝ってやる。

「アワアワ…：そんないいですよ…アセアセ…：悪いですからあ…」

アワアワって口から出るのか…：アセアセも。

「いいのよ、別にこのくらい……でもすごい量の本だね。図書室の人？」

「い……いえ……そんな……とんでもない！」

私は……そんな立派な人間じゃないんです……犬みたいなモノですから……」

犬……？

ちよつと、雲行きが怪しくなってきたぞ？

ただのメガネのドジっ子に見えるが。

アワアワというアニメちつくな擬音を、口から出すうえに、自らを犬だと……？

初対面の人間に、ずいぶんと自己主張をしてくるなあ……こいつ。

おそらくこいつは、自分のキャラを掴んでいるタイプだ。

しかし、これがエロゲーなら、イベント発生のポイントであり、出会いのCGとして記録される場面だ。

このメガネっ娘は、きつと話に絡まってくるぞ。

「犬なんて……あははっ、面白い！」

蘭子は、気にせずに笑っている。

こいつの順応性の高さがうかがえるな。

蘭子が、本を箱に戻そうとする。

「ああ、もうこの箱、底が抜けちゃってて、入らないね。

ねえ、この本、どこに持っていくの？

せつかくだから、私たちも手伝うよ」

俺は何も言っていないぞ……蘭子。

「えー……そんな、美男美女のお二人に、こんな雑用を頼むなんて、みやび様に叱られてしまいますう！」

ほら、触手が出たぞ……みやび様？

なんだ？血を吸う奴か？

「いいって……私たちも、ヒマしてるだけだから。

それに、一人じゃ持てないでしょ？」

そう言っつて蘭子は、俺の手に本をどんどん乗せてくる。

俺は何も言っつてないぞ、蘭子。

「よし、これで全部つと。」

それで、どこまで運ぶの?」

メガネっ娘は、スカート裾をつかんで泣く、真似をする。

「だ〜……お優しい方々ですう!」

メガネは、涙を滝のように流す……という雰囲気、「だ〜」で示したんだろう。

かなりのものだ。

「では、せっかくのご恩ですので、有り難く頂戴いたしますう!

ご案内しますので、こちらへ!」

メガネは、2冊の本を持って俺たちを導く。

蘭子が3冊の本を持って、ついていく。

俺は、ぼろアパートの床が抜けるほどの量の本を両手で抱えて、ついていくしかないだろう。

メガネ……やるじゃないか。

俺を、下僕のように扱うとは……確か俺は、一言も発していないんだが……

俺たちは、階段をいくつも上がる。

俺は、本を落とすと拾うのが面倒だから、ゆつくりと大事に一歩一歩足を運んだ。

前に行く二人は、俺を振り返りながら、先へ進んで行く。

二人とも、なにか妖精が生贄を森へ誘うような付かず離れずの、距離を保ち誘導をする。

二人は何かを笑いながら話している。

ずいぶんと、仲が良さそうだな。

余裕もありそうだ。

それから、やっと俺たちは、ある部屋にたどり着いた。

メガネが扉を開け、中に入る。

続いて俺も入ると、そこはごく普通の小さな部屋だった。

部屋の真ん中に二つ置かれた長机に、本を置く。

ふう……疲れた。

俺が、こんなに本を大事に抱えたのは、快○天だけだ。

これは、それなりのご褒美シーンをもらわないと、割に合わないぞ、メガネよ！

ボイスもつけろよ？

机に両手をついて、息をはずませていると、部屋にもう一人いた事に気づいた。

女だ。

青みがかった銀髪の長い髪。陶器のような肌にエメラルドの瞳。

そいつは椅子に座って足をくみ、西日を受けてながら、俺と蘭子を見つめている。

「これはどういう事？……こよみ？」

「ハウウー……みやび様、違うんですー！」

メガネは、みやび様という女の足元にすがりつく。

「この……男の人が……本で両手がふさがり身動きできない私に、目的で近づいたため、

箱が壊れてしまい……しかたなく、私がこらしめて、下僕として使ってるんですう……」

はあ？

メガネ……どうやら、お前クセがあるようだなあ。

俺が何かを言おうとしたところに、蘭子が笑いながら入ってきた。

「あはは、こよみちゃん、ほんとに面白い！」

蘭子、お前の感覚がわからん。

「……」

女が俺を睨んでる。

まさか、信じたわけじゃないよね？

「……どういうつもりなの？」

ほう……敵だな。

なんて言おう。

全然話は違うが……体が目的であった事は、いなめない部分がある。

しかし、助けてやったのに、メガネはなぜ嘘をつくんだ？

女の足元にすがりつくメガネに目をやる。

「ふるふる」

ブルブルと言っている。

こういう事を言う奴は、嘘をついている奴だという事がわからんのか、この女は？

しかし、睨む女はなかなかの目力だ。

正直、俺はビビっている。

ケンカは、した事がない。

中学生の妹にも負ける自信がある。

っていうか、俺に非はない。

なのになぜか抗えない空気を出されている。

……ピンチだ。

なぜか、蘭子も助けようとしめない。

グヌヌ……この状況をクールに切り抜ける手は、あるか!?

次回へ続く……!

「あなた……なぜ、何も言わないの?」

ええ!?!……続けるん?

ダメダメ!!次回!

みやび様

俺には、非がない。

今、俺が、このみやび様に言い訳するのは簡単だ。

ただ、俺は言い訳が、嫌いだ。

なんか、情けなく見える。

全然クールじゃない。

よし少し、整理しよう。

おれは、メガネの本をここまで運んでやっただけだ。

メガネに、手を出すそぶりは、1ナノも見せてないはずだ。

エロゲーには例えたが、脳内での事だ。

ノーカンだろ。

この部屋には、四人の人間がいる。

そのうち、俺の無実を知っているのは三人。

って事は、敵は一人か。

どう考えても、俺が有利な状況だ。

よし、言い訳は、ナシだ。

知り合いの蘭子もいるから、カッコ悪い事は避けよう。

そうだな……どうだろう?……ここで無言のまま立ち去るのは。

無言で立ち去る行為自体は、クールに分類される。

立ち去った後で、蘭子が誤解を解いてくれる可能性が高い。

だとすれば、俺は言い訳もせず、責めもせず、ただ立ち去った男。

クールじゃないか。

トレンチコートが似合うじゃないか。

蘭子のポイント―UP

みやび様ポイント―UP

メガネ……こいつは無視しておこう。読めないからな。

よし、やってみるか……

俺は、何も言わずに背を向け、ドアノブに手をかける。

「逃げるのか？」

みやび様の声だ。

いい声をしている。

喉に引つかかりのない、シルクのように、なめらかな声だ。

俺の耳から、スルツと入り、軽い産毛をなでた後、渦巻き菅をチクルチクルとくすぐっている。

ぜひ録音して、寝る前に聴いていたい。

ワイヤレスじゃなく、有線のヘッドフォンで聴きたい。

こういう事をする、明晰夢が見れ……………

いや……………待て、本質がズレている。

逃げるのか？……………だと…

なかなか、手強い奴だな、みやび様。

そう言われては、黙っていられない気分になるじゃないか。

しかし、何を言う。

言い訳はしないと決めたから、違う事を言わなければならない。

うゝむ…

しかし……………蘭子よ。

お前は、なぜ黙っている。

どう見積もっても、お前は俺の味方をすべきポジションじゃないのか？

今、お前は、どんな顔をしているんだ？

俺は、ドアしか見えないから、わからないんだ。

友達が、スケベ呼ばわりされて、逃げるのか？と、追い打ちをかけられてるんだぜ？

つつーか、全ての始まりは……………お前がメガネの本を拾った事、部屋まで持って行くと言った事、

部活巡りに、俺を付き合わせた事、だろ？

なぜ、俺をフォローしようとしなんだ？

謎めいた事をするんじゃない。

わかりやすさの権化でいろ。

ふう…いたずらに第三者を責めても、仕方がない。

今、優先すべき事、いわゆるプライオリティは、みやび様の「逃げるのか？」に対する答えだ。

どうする？

それなりに、時間は使っているぞ…

次の言葉を、向こうに取られるのは、危険だ。

それに、もう無言は選択肢として、マイナスの空気をおびている。何か言わなければ！

……よし！

「いい声だ……大事にしな」

俺はドアを開け、廊下に出てドアを閉めた。

………

………

あちやく。

オイラ、やつちやったかも。

つつても、もうドア閉めちやった。

うくん、どうしよう…ダツシユで家に帰るか？

気持ちは、ぜひそうしたいと言っている。

でも、ダツシユはクールじゃない。

いや、すでにクールじゃない事を言ったでしょ、アンタ。

どうしよう。

えっと、えっと…

腕を組んで考えていると、ドアが開いた。

誰だ？

誰が出てきてもおかしくないぞ？

蘭子であれ！

帰ろうって言ってくれ！

もうお前だけでいい！

今の俺は、お前しか望んでいない！

誰かが俺の肩に手を置いた。

俺は振り向く。

そこにいたのは、蘭子だ。

やっぱり、お前は友達なんだな。

「らん……」

「ちよつと、お花を摘みに行ってくるね」

蘭子。

……育ちがいいな。

蘭子は駆けていく。

どうしましょ。

この状況で、蘭子：俺にかける言葉は、それですか？

さすがに、目が点になつたぜ。

お前は、希望をみせたよな。

俺に、希望を見せてから、落とすとは。

ダメージが倍になる事をするんじゃない。

せめて、摘んだ花を一輪、俺の墓にそなえてくれよな。

しかし、どうする？

蘭子は、戻ってくるだろう。

待つていないのは、なんか俺が冷たいだけになつてしまう。

俺が、蘭子を待つかどうか逡巡していると、ドアがもう一度開いた。

メガネだ。

何の前触れもなく、俺をピンチに落とし入れた張本人。

こいつ、何を言う気だ？

お詫びの言葉だよな？

そうなんだろう？

聞いてやろうじゃないか。

さあ、言え。

詫びろ！

「なんつって」

オウマイゴツ。

メガネをかり割るしかないか。

片方割るか、両方割るか：それが問題だ。

両方割れば、修理代が高いな。

だが、片方割れば、もう片方は見えるから、まだメガネとして使える。

そのまま、割れたメガネをかけて帰るだろう。

そっちの方が、メンタルダメージは大きいか。

片方だけ割ろう。

「ずびばせーん……調子に乗っちゃいまじだー」

ん？よく見たら、メガネ……タンコブできてら。

こいつ、泣いてら。

ぎまあ。

「あの……みやび様と呼んでいるんで、中へどーぞ」

フフツ……謝罪か。

みやび様。

恥ずかしい奴め。

あんなセリフを吐いた男に謝罪するハメになるとはな。

まあ、これも身から出たサビだ。

こんな下僕を育てた貴様のミスだと、己を呪うんだな。

受けてやろう。

俺は、ドアを開け部屋に入る。

さあ、詫びろ！

銀髪のみやび！

「ねえ、あんた……その本を本棚に入れなさい」

は？

謝罪、ちやうんすか？

「……早く」

こいつ……できるな。

俺の体は勝手に動き、素直に本を本棚に入れ始めた。

これは、ただの敗北じゃない。

価値のある敗北だ。

次は負けない。

みやび様……いい声だな。

コーヒー

俺は、みやび様の命令のもと、部屋に設置されている本棚に本を入れていく。

無言で作業をしながら、俺はいくつかの事に気がついた。

まずは、ここが何かの部室である、という事。

部屋の中には、大きな本棚の他に、小さなキッチン、電子レンジや電気ポット、冷蔵庫まで揃っている。

教室ではない事は、明らかだ。

広さは、12畳くらいだろうか。

南側に大きな窓があり、そこから、午後の光とさわやかな春の風が舞い込んできている。

そして、この大量の本は、図書室の本ではないという事。

はじめ、メガネが廊下で本を落としていた時は、図書室の本を借りてきたのだろうと思っていた。

しかし今、一つ一つ本を納めていって気付いたが、どの本にも学園の印鑑や、バーコードはなく、まささらな新品だった。

かなり高価な本も多い事から、おそらくこれは誰かの私物なのだろうという事。

そして、その本の内容が偏っている、と言う事。

元々、本棚に入っている本を含め、俺が運んできた本のタイトルには、

「〓事件の真実」「殺人者〇〇の告白」「完全猟奇殺人マニュアル」など、ずいぶんと物騒なものばかりだった。

その数も、200冊や300冊以上あるようだ。

おそらく、みやび様かメガネの趣味なのだろうが、ろくなものじゃない。

こいつらは何か、完全犯罪でもやろうとしているんじゃないだろうか？

まったく、俺はどうしてこんな奴らと同じ部屋にいて、本の整理を

しているんだろう？

俺は、そんな事を考えながらも、タイトル、本のサイズ、背表紙の色、そういったものを意識し、

本棚に、なるべく綺麗に揃うよう、収めていく。

こんな時でさえ、いい加減にやる事が出来ない自分が、好きでもあり、また情けなくもある。

後ろで眺めているメガネが、感嘆の声を上げる。

「わあ！樹殿はキレイに本を並べるんですね！

なかなか、細かい仕事をなさいます……男のくせに」

余計な事を言うな……メガネ。

それに、お前は どうして俺の名前を知っているんだ？

自己紹介などしてないぞ？

っつーか、お前も手伝えよ。

さつき、犬だとか言っていたら。

俺が一人で作業してるじゃないか。

俺は犬以下か……？

作業を開始してから15分。

知らない者と、同じ部屋に居るといのは、居心地が悪い者だ。

街のトイレで、二人きりで小便器を使っている時も。

エレベーターで、二人きりになった時も。

夜道で偶然にも、帰る方向が同じで並んで歩いている時も。

親戚の集まりで、大して親しくもない親戚とご飯を食べている時も。

いや、どうでもいい。

さつきと終わらせよう。

やっと本の整理が終わって後ろを振り向くと、メガネがエプロン姿になり、キッチンで作業をしている。

俺の作業が終わった事に気付いたのか、俺を振り返る。

「あ、おっつー。

樹殿。

ちよっと、座って待っててくださいいな」

おっつーか…
軽いな。

さつき、俺に地獄の時間を味あわせた事など、みじんも覚えていないのだろう。

タンコブの痛みじや、弱かったようだな。
やっぱり、メガネを割つときやよかった。

「あたい、本当は裸エプロンにしようと思ったけど、どうせ樹殿はカツピカピのドーテーだろうから、

刺激が強すぎると思つて、やめときました！…テへ」

こいつなんなんだ？

見たかったのに…

憎いぜ、ドーテー。

「はい、樹殿。

コーヒーをどーぞ」

「ああ、どーも」

「ミルクと砂糖は入れますか？」

「…ミルクだけ」

「はい、どうぞ」

「どーも」

「あたいの、ヨダレも入れますか？」

「じゃあ、少しだけ」

「はい」

メガネは口をもごもごさせ、ツーツと口元からトロみのあるヨダレを垂らしてきた。

俺は、すかさずコーヒーを避ける。

その瞬間、ポターツと机にヨダレが広がる。

こいつ、マジか？

ノリとかじゃないのか？

クールな男は、とっさのボケにも素早く粹に返すものだど、心得ていたが、

こんな危険をはらんでいたとは、知らなかった。

メガネは、口のはしから糸を垂らしながら、
「なんつって」

いや、垂らした後だから、「なんつって」じゃないよ、アンタ。
今、はつきりした。

このメガネは、本物だな。

恐ろしい奴だ。

また何かされる前に、さっさとコーヒーを飲んで帰ろう。

俺は、おもむろにコーヒーを口に運ぶ。

メガネは、濡れ布巾で机を拭いている……しかし、

その時俺は、メガネの奥の目が瞳孔を限界まで開き、拭いている机
でなく、コーヒーを凝視している事に気付いた。

俺は、ピンときた。

それは、漫画で、頭の上に出る電球のような、軽いヒラメキじやな
い。

そう：例えるなら、北〇の拳でシーンが変わるときに出る、横に走
る稲妻のような、閃き。

それが、俺のバックに走った。

俺は、生粋のゲーマーだ。

どんなジャンルのゲームも一通りプレイしてきた。

アクション、RPG、シューティング、スポーツ、パズル、格闘、ア
ドベンチャー、育成、鬼畜、調教、etc…

それらで、鍛えられた俺の反射神経が、唸りをあげ、

今、俺の血肉となり、無意識のうちに発揮された！

このコーヒーには、すでに何か仕掛けられている！
なぜそう思ったか……それは、

この部屋にある、数々の物騒なタイトルの本。

俺の唯一の仲間である、蘭子の謎の失踪。

高校生なのに、コーヒーという色も味も濃い大人専用の飲み物。

放課後という：一日の中で最も何か起きやすいと言われる、魔の
潜む時間。

自己紹介もしていないのに、名前を：下の名前を知られている事。

メガネの、『ヨダレ』という、恐怖と色気が共存した先制攻撃のよう
な、見え見えの目くらまし……

これらの無関係に思えるファクターが、俺の頭の中で複雑な旋律を
奏で、

不協和音だったはずの音が、ふと、ハ短調の悲しいメロディーを紡
いだ。

そのメロディーは、一つの答えを導き出す。

……………こいつら俺を殺そうとしている!!

視線

いや…いくらなんでも、考えすぎか…

俺を殺したところで、こいつらにメリットはない。

メガネは、イカれている事はハッキリしているが、理由なき殺人に手を染めるほどではないだろう。(願望)

そうであってくれ。

しかし、コーヒーには口はつけないでおく。

俺は、用心深いんだ。

長男だし。

無難を好む。

俺は、コーヒーカップを置き、部屋を見回した。

別に意味はない。

手持ち無沙汰なだけだ。

蘭子…早く戻ってこい。

「あなた…名前は？」

みやび様が言う。

「樹…：桜木 樹だ」

こういう時は、必ず先に名前から言つて、フルネームを言う方が雰囲気であるよな。

「ふーん…：そう…」

私は、雅…：楠瀬 雅（くすのせ みやび）。

そして彼女は、暦…：火巡 暦（ひめぐり こよみ）。

よろしくね」

「ああ」

順序を守っているじゃないか。

わかっているな…：みやび様。

「桜木…：さつきコーヒーを飲む時、何か考えてたわよね？」

「え？」

「コーヒーを飲むうとして、何かを考えて、飲むのをやめたでしょ？」

「…」

「どうして？」

「なんで、みやび様はそんな事を聞くんだ？」

「さては……あの暦の視線には、やっぱり何か意味があったんだな？」

「よし、ここは俺の考えをみやび様に伝え、こいつは只者じゃない感を出して、二人にアップかましとこう。」

「ああ、その事か？」

「ふと、嫌な予感がしたんだ」

「嫌な予感？」

「そうだ、さつき本を納めている時に、本の題名が偏っている事に気づいた。」

「事件や、殺人がらみにな。」

「それに、暦の怪しい行動から、少し警戒をさせてもらったんだ。」

「俺には、死に戻りの能力はないからな」

「……」

「みやび様が、矢を射るように俺を見つめている。」

「死に戻りは、余計だったか？」

「俺は、人に見つめられる事に慣れていない。」

「女の子には、特にそうだ。」

「なぜか、俺のいやらしい考えが見透かされてしまう気がする。」

「そんな事は、考えていないが……」

「いや、少しは考えているが……」

「いや、半分以上は、それで埋まっているが、そんなのは、男として」

「正常な思考だ。」

「だから、本当ならここで、すぐに目をそらすのだが、今はアップをかましている最中だ。」

「ここで目をそらすのは、効果的じゃない。」

「でも、恥ずかしいは、止まらない。」

「ロマンティックも止まらない。」

「だが俺は、目を見つめられない時の裏技も心得ている。」

「それは、相手の眉間を見るのだ。」

そうすると、相手は目が合っていると錯覚するらしい。
だから、俺はみやび様の眉間を見つめ返した。

……綺麗な眉間だ。
シワひとつなく、冬空のように涼やかだ。

眉間が綺麗だと思う事なんて、あるとは思わなかった。
初めての経験だ。

バージン眉間だ。
なんか、恥ずかしいな。

眉間は見ずに、少し上の額を見る事にしよう。
さほど距離は変わらないだろうから。同じ効果があるだろう。

……しかし、綺麗な額だ。
前髪がある為に、全てが見えるわけではないが、透けて見える部分
だけでも十分綺麗だとわかる。

広くもなく、狭くもない、丁度いい額。

だが、もしあの前髪を全て上げたら、額に邪眼が開いたとしたら、ど
うしよう。

そうなる、俺はみやび様の目を見ている事と同じなんじゃないだ
ろうか？

それだと、恥ずかしいな。

少し視線を落とそう。

口でも見るか。

……綺麗な唇だ。

みやび様は色白だから、薄い桜色の唇が、より赤く見える気がする。
唇は若干、厚めになっている。

クールな印象の顔立ちだが、少し厚めな唇がアンバランスさを引き
出し、

そのギャップが魅力へと昇華されている。

そういえば、唇の色と乳首の色は同じだと何かで見た気がする。
ってことは、みやび様の乳首の色は……

これは、完璧に恥ずかしいな。

俺は窓の外を見た。

少し、夕暮れに向かい出した空の青だ。
懐かしさと、悲しさを混ぜた空の色。

耳をすませば、豆腐屋のラッパが聞こえてきそうだ。

……ちよつと、待て…。

俺は、今、完全に目を逸らしている。

やるじゃないか……みやび様。

俺に、見つめる事さえ、許さない気か？

悪くない。

どうやら、俺には下僕の素質があるようだ。

さつきから、ずっと心で『みやび様』と呼んでしまっているし……

だが、嫌じゃない。

暦よ……お前の気持ち、少しだけわかる気がするぞ。

勘違いするなよ……少しだけ……だからな。

結果、俺は視線をあちこちに移しながら、完全にうろたえているよ

うに見えただろう…

しかし、みやび様は、

「……桜木……合格よ」

は？

俺は、何かに合格したらしい…

下僕にか？

タイトル

「合格？」

「ええ…そうよ桜木」

「なんに？」

「今のは、入部テストよ」

「入部？」

みやび様は、シルキーボイスで何を言ってるんだ？

入部だと？

「ちよつと待ってくれ。」

俺は、入部するなどは言っていない。

それに…ここが何のクラブなのかもしれないんだ

「ここは、知ってるの通り『ロダン部』よ」

はあ？

「ロ…ダン部？」

「ええ…そうよ、ここはご存知『ロダン部』なの」

「いや…知ってるの通りとか、ご存知とか、言っているが、俺はそんな部活は、聞いた事がないぞ…」

「そうなの…って事は、桜木は勘は鋭いけど、アンテナは伸ばしてないって事ね」

おお、少しだけ褒められたぞ。

そして、すぐにけなされたぞ。

「そう…なるのか？」

まあ、いいが…それで、何をする部活なんだよ？」

「…！」

ん？…なんだ、みやび様が急に不機嫌な顔になった…

俺は、なんかまずい事を言ったか？

「桜木…どうしたの？…あなた、さっきから質問ばかりしてるわね…」

「ああ…入部やら、部活やらと、わからない事ばかりだからな」

「そう……どうやら私の見間違いだったのかしら？」

「はあ？」

「あなたの頭蓋骨の中に入っているのは、作ったばかりのカレーかって言ってるのよ！」

「はあ？」

アゲイン。

「少しは、自分で考えてみようとは、思わないワケ？」

「……」

……ほう……なるほど。

確かに、みやび様の言う通りだ。

俺は少し、混乱していて、自分の頭で考える事を放棄してしまっていたかもしれない。

ちよつと、考えてみよう。

……ロダン部？

ロダンと言えば、有名なのは、フランスの彫刻家、オーギュスト・ロダンだ。

その代表作には、「地獄の門」があり、その中に「考える人」という像がある。

それと関係しているのだろう。

ロダンを研究する部活……という事か？

それとも、彫刻部だろうか？

ってか、それは美術部だろ？

しかし、この部室は、どう見ても美術に関連するものじゃない。ただの休憩室みたいなもんだ。

なんだ？

一体、なんの部活なんだ？

俺は、アゴに指を当てて考える。

「フッフ……どうやら、チャツネが入ったようね！」

そう！それよ！……桜木！」

チャ……チャツネ……なんだ？

急に果物のぐちやぐちやしたのが、入ったぞ？

そして、みやび様は立ち上がって腰に手を当て、俺を指差す。

「桜木！…それが、我がロダン部の正しい姿よ！」

覚えておきなさい！」

!!

「ま…まさか…『考える人』の形をする…それがこの部活の内容…！」

「違うわ」

「違うんかい！」

「そんなバカみたいな事、誰がするのよ」

「ごもつとも。」

「ここは、『考える人が集まるサロン』なの」

「考える人…？」

「そう、この世には様々な謎が溢れている。

なのに、ほとんどの人は、巷に氾濫している情報に踊らされ、与えられた物を消費するばかりで、

自分の頭で考える事を忘れてしまった…」

「なんか、始まったぞ…」

「でも、そんな事では、誰かの作った考え方をなぞるだけで、正しい自分と向き合う事ができなくなってしまおう。」

しかし、人はそれを自分の考えだと誤解したまま、生きていくの。

でも私は、そんな誰かに作られた人間にはなりたくない！

その為には、どうするか？

そう…考えるのよ…それが、この部活『ロダン部』なの！」

……おお…ちつとも、わからん。

ほんとに、そのふろしきで合っているのか？……みやび様よ？

「しかし、バカにしないで……ロダン部…それは、凡人どものはびこる世間を欺くカリソメの姿……」

実は、このロダン部には、裏の顔があるの……」

ちよつと待つてくれ……

俺にはまだ、ロダン部さえまともに理解できていないのに、早くも裏の顔が出てきそうだ。

展開のスピードが急に加速している！

どうした!?

アシスタントを雇ったのか？

編集者が変わったのか？

考えるヒマを、与えてくれないじゃないか！

だが、みやび様は、言いたがっている。

ロダン部の裏の顔を、早く言いたくてしようがなさそうだ。

R Gだ。

こういう奴には、言わせてやるしかない。

すでに、もう人の事など、関係ないんだから。

ただの言いたがりになってるんだから。

ならば、言え！

みやび様よ！

裏の顔とはなんだー！

「ロダン部……その裏の顔は、この欺瞞に満ちた世界を、誠で研がれた光の刃で切り開く……」

そう……それこそが、我ら……『放課後 殺人クラブ』なのよっ!!

ドーーーーン!!」

がーん!!

「そうなのかー!!」

じゃあ、俺は帰る……」

「待ちなさいー!!」

コーヒーには

「話が理解できないからって、しつぽを巻いて逃げ出すなんて……
桜木って、しょーもない男なのね！」

…何？

俺は、ドアノブを掴もうとした手を、止めるしかなかった。

…しょーもない男だと？

こいつは黙ってられない。

「誰がしょーもないって？」

「あら、だってそうでしょ？」

相手の言っている事が、難しいからって、ただ逃げ出すなんて、一流の男がする事じゃないでしょ？」

みやび様は、腕を組み少し顔をあげて、俺を見下すような瞳を向ける。

「逃げ出す？」

いつ俺が逃げ出したんだ？」

「今よ…ドアノブを掴んで出て行こうとしてたでしょ？」

「ふっ…勘違いも甚だしいなあ。」

今俺が、ドアノブを掴もうとしたのは、出ていく為じゃない」

「じゃあ、何よ？」

さあ…ここが勝負だぞ…俺。

逃げ出そうとしてたんだから、他の理由なんてないんだ。

どう言えば良い？」

何かうまい言い方はあるか？

頭を働かせる…きつと答えはあるはずだ。

脳を回転させるんだ。

脳を…脳…

そうだ、コレだ!!

「俺は、今、話を理解する為に、脳を回転させていたんだ。」

しかし、あまりにも活発に活動をする為に、脳に電気が溜まってし

まったから、

それを逃がす為に、ドアノブを掴もうとしただけの事さ」

「なんだ、そうだったの。」

それで、理解はできたワケ？」

「ああ…だいたいはな。」

だが、間違いがあつてはいけないから、もう少し詳しく話してくれないか？」

「ええ、いいわ」

ふう…何とか回避できたみたいだ。

疲れた…座ろう。

「この国で罪を犯した者がどうなるか、あなたは知ってる？」

「当然だ。罪人はシユラに島流しにされる」

「そう…どんな軽い罪だろうと、罪を犯してしまえば島流しよ。」

その結果どうなる？」

「どうなるって…簡単な事だよ、この国から悪人が減って平和な国になる」

「そうね…：罪人は、二度とこの国には戻ってこれないんだから」

「ああ…シンプルで良いシステムじゃないか」

「シンプル…：確かにわかりやすい事は間違いないわ。」

でももし、シユラに流された罪人が、罪を犯してなかったら？」

「…：なんだよ、冤罪の事を言いたいのか？」

「…：それもあるけど、質問に答えてくれない？」

島流しにされた罪人が、犯人じゃなかったら、どうなる？」

「…：まあ、もし間違つて、そうなったんだつたら可哀想だな」

「それだけ？」

「…：他に何かあるんだ？」

「決まつてるでしょ？」

まだ、この国に犯人が残ってるって事よ」

…：まあ、それはそうだ。

「そうだと…：この部活の…：殺人…：クラブ？…：と、何の関係があるんだよ」

「その真犯人を見つけて、私たちが殺すのよ」
「はあ？」

「今、殺すって言ったか？」

みやび様は、怖い顔をするでもなく、不敵に笑うでもなく、ただ自然な表情をしている。

「……ろす？」

「ええ」

「いや……そ……そんな事は、ケーサツに任せろよ」

「何言ってるの？」

ケーサツが間違えた事なのに、ケーサツに任せてどうするのよ」

「……いや、そうだとしても、高校の部活でやる事じゃないだろ……」

「だから、裏だつて言ってるじゃない」

「……本気……なのか？」

「冗談を言っているように見える？」

「……いや、見えません。」

「だから、聞いてるんです。」

「人を、殺すって……簡単には出来ないだろ……」

「そんな事ないわ……桜木。」

「あなたがさつき、コーヒーを飲んでいたら、あなたは死んでいたのよ……」

みやび様は、どこか自慢げに言い放った。

「は？」

俺は、机に置かれた冷めたコーヒーに目をやる。

「その中には、夾竹桃という植物の毒を入れているの。」

桜木の運が悪ければ、死ぬわ」

「……な……何言ってるんだよ……毒なんてそんな簡単に手に入るワケないだろ」

「いいえ、その夾竹桃は、この学校の前にある道路脇に植えられているのを採ってきたの」

「そ……そうなの？」

「ええ、よくある植物よ。」

暦、見せてあげて」

「はい、これです」

暦は、笑顔でシンク横のコップに入れられた、赤い花のついた植物を持ってきた。

確かに、よく見る気がする。

これに毒があるのか……

怖いもんだ。

何でこんな危険な植物を、道路脇に植えているんだよ、まったく。

へえ、これに毒が……

……え？

これを、俺のコーヒーに入れた？

「え？……ええ??」

お前らは、俺を殺そうとしてたの？」

「そうだけど、死んでないじゃない」

「おい！ふざけんなよ！」

「ふざけてないし」

「俺を殺そうとしたのか!?!」

「だから、死んでないでしょ」

「それは、結果論だろ！」

もし、俺がこのコーヒーを飲んでたら、死んでたかもしれないんだろ?」

「そうよ」

「なんだ!?!」

俺に何か恨みがあるのか!?!」

「いいえ」

「えー！」

理由ないの!?!」

「そうね」

俺は驚いて、二人の顔を交互に見るが、何の表情もない。

「サ……サイコパス……か?」

「え?」

「お前ら……サイコパスだろ!？」

「へえ、サイコパスを知ってるんだね。」

桜木もそういうの好きなんだ」

「好きなもんか!？」

そんなものは、ドラマや漫画の世界のモノだ!

現実にはいられたら、とんでもないんだよ!」

「何を喚いているのよ。」

少し落ち着きなさい……見苦しいわよ」

……見苦しい?

そう……か……では、ちよつと落ち着こう。

えつと、俺はさつき殺されかけたんだな。

たいした理由もなく……

「落ち着けるか!」

「もう、うるさいわね。」

一応言っておくけど、サイコパスの割合は、ある研究では25人に1人の割合だと言われてるわ。

だから、そんなに珍しい事じゃないのよ。

例えるなら、日本人でA B型の方は、人口の10%だから、その半分位と同じ数だけ、

サイコパスの人もいるって事になるわ。

ね?そんなに珍しくないでしょ?」

……いや、比率の話じゃないんです。

しかも、あなた方は、サイコパスだつて言われて、否定しないんですね……

「いや、おかしいだろ……もし、俺が死んでたら、どうするつもりだったんだよ?」

「そんな事、考えてないわよ。」

私達は、計画殺人をしようとしたワケじゃないんだから」

怖い事を言ってます。

「いや、だから、死んでたかもしれないんですよ?」

どう処理するつもりだったんですか?」

「死んだら、死んだ時よ。」

その時に考えるわ」

…もう、話したくない。

「そんな事より、私達が本気だって事がわかったでしょ？」
わかり過ぎて、怖いんだよ。

「…俺、そろそろ帰…」

その時、部室のドアが開いて蘭子が入ってきた。

「蘭子…ここにいちやダメ…」

「おまたせー！」

ミヤビ！

はいこれが、あたしと樹の入部届けね！」

「よし…受理した！」

一体、どういう事でしょうか…？

入部

「…蘭子…にゆうぶって…」

「うん！決めちゃった！『放課後 殺人クラブ』って、楽しそうじゃない！」

こいつ、いつそれ聞いたんだよ……

それに、なんで俺まで入部になるんだ？

「ねえ！みやび！」

まずは、どんな事をすればいいの？」

「そうね、まずは簡単な問題から片付けていった方がいいわ。

暦、『オーギュスト老人の事件簿』を出しなさい！」

ロダンでいいだろ。

どっかの少年みたいに言うな。

「はい！」

暦は元気にそう言うと、一冊のノートを取り出して、みやび様に渡す。

その表紙には、「シャポニか自由帳」という文字が二本線で消されて、「ろだんの書くヤツ」と雑に書かれている。

きつと、子供の頃の余ったノートを使いまわしたんだろう……そのくらい、新しいのを買えよな。

表紙の昆虫の写真は、なぜかみやび様と暦の昆虫コスプレ写真になっっている。

そこに、こだわるなら、やっぱり新しいのを買え。

「みやびー！それには何が書いてあるの？」

蘭子は興味津々だ。

……本当に順応性が高い女だ。

きつと、急に異世界転生しても、わお！楽しそう！つか言って、すぐに冒険を始めるだろうな。

そして、さつさと魔王を倒して、元の世界に戻り、色々あった事も、一夏の思い出的なイメージで、アルバムに閉じて終わらせそうだ。

なんか、この部活について、色々聞きたい事はあるが、蘭子を見ていたら、そんな事を考えている自分がバカらしくなってくる。

「この事件簿には、世界中の奇妙な事件や出来事、学校近辺での噂や色んな行事、

生徒からの悩み相談など、が記載されているのよ。

例えば…ゾディアック事件や、ヴォイニツチ手稿…

サノバビッチ一家や、ねこぴっちゃん漫画とか、かるぼつきがどうたらこうたら…

他にも、色々な物が徒然なるままに綴られているわ」
なんで、「いん」を踏んでんだよ。

つつーか、たいした事は書いてないじゃないか…

「じゃあ、まずは…：簡単な依頼で、

○逃げた猫を探して欲しい

○妹が言う事をきかない

○勉強をしてたら深夜ラジオを聞きちゃう…とか…
しようもないな。

「○消しゴムを使い切ってみたい!

○傘で空が飛べるか?

○初対面の人にいきなり告白して、成功する確率は?

○初めてのダッチ○イフ作り!…とか…

ユーチ○ーバーにまかせろ。

「あ…コレがいいかな…

『うちの近所にケルベロスが出るから、退治してほしい』ってやつは、どう?」

…ケルベロスだって?

「わお!おもしろそう」

蘭子は、身を乗り出す。

勘弁してくれ…：俺は、しょーもない事に付き合わされたくない。

「おいおい、ちよつと待てよ…：ケルベロスなんているワケないだろ?」

「そうよね」

おお、みやび様は意外にも同意してくれた。

じゃあ、なんでその依頼をチョイスしたんだよ？

「何よ、二人とも。」

もつと、夢を持ちなさいよ！」

「夢って……っーか蘭子は、その話を信じるのか？」

「信じるも何も、実際に見た人がいるから、その依頼が来てるんでしょ？」

「だったら、ホントって事でしょ」

蘭子は、人差し指を立ててウインクする。

可愛い奴だなあ蘭子は。

そして、バカだ。

「いやいや、その前にまず、この部活は悪い人間を殺すつてのが目的なんだろ？（信じてないけど）」

そんな便利屋みたいな事をやってどうするんだ？」

「的確な指摘ね、桜木」

褒められた。

嬉しいワイ。

「だが、甘いわ。」

暦……理由を教えてあげて」

「はい、みやび様！」

いいですか？桜木さん。

この部活は、出来たばかりであり、部員も一年生ばかりです。

それでは、殺人の依頼など入ってきません。

その為に、小さな依頼でも数をこなしていく事で、大きな依頼も入ってくるようになる。

まあ、これは宣伝のようなものですよ。

それに、一応部活ですから、学校側に活動報告も必要ですからね」

……なるほど、一理ある。

っーか、こいつらも一年かよ。

……だとしても、

「でも、いくら便利屋のような事をしたって、殺人の依頼なんてものが、くるとは思えないぜ?」

「そうかもしれないわ。」

でもね、すでにこの学校には、隠された闇が存在してるのよ」

「隠された闇?」

「ええ…ある殺人事件に関わった人物が、この学校にいるの」

「殺人事件だって!」

冗談だろ?」

この学校で、そんな話は聞いた事がないぜ?」

「本当の話よ。」

ただ詳細は、まだ言えないわ。」

知りたければ、まずこの問題をまず解決してみせて!」

「すごいじゃない、樹!おもしろそうだから、やってみようよ!」

蘭子は俺の腕にすがりつく。

偶然か、わざとか知らないが、蘭子の胸の感触が上腕部の辺りに感じている。

俺は、全神経を上腕部に集中させた。

「ね?やるでしょ?」

「…ああ」

俺は、思考も止めている。

返事をしたワケじゃなく、ただ声が漏れただけだった。

「よし、決まりね!」

それじゃ、みやび。

まず、私と樹で、その依頼をくれた人に会ってくるわ。

誰の依頼なのか教えてよ」

「暦、言ってあげなさい」

「はい、みやび様。」

これは、一年B組の長塚 京子さんの依頼です」

「OK!じゃあ今から行ってくるわね。」

なんかあったら、連絡するから!」

あつ、でも連絡先知らないよね…じゃあ先に皆で連絡先を交換して

！」

俺達は、お互いの連絡先を交換し合い、俺は蘭子に腕を引っ張られながら、部室を出て行った。

俺は、ただ言われるままに動きながら、さっきの腕の感触を必死にリピートさせている。

「樹、ありがとね！」

おもしろそうな部活が見つかったよ！」

「ああ…そりや良かったな。

でも、蘭子が最初に言っていた、青春とは全然違う気がするけどな…」

「そう？」

そんな事ないよ、だって今あたし、凄くドキドキしてるもん！

ホラー！」

蘭子は、俺の手を掴んで胸に強くに当てる。

プニヨン。

「!?!」

俺の手を、この世の物とは思えないほどの感触が、包み込んだ。

以前に、時速60キロで走る車の窓から手を出せば、女の子のおっぱいと 同じ柔らかさだと聞いて、

何度も試して、その柔らかさを記憶していたが、そんなものじゃ比べ物にもならない事を、俺は知った。

とてつもなく柔らかいくせに、弾力もある。

手を包み込みながら、その手を跳ね返してくる。

矛盾している。

ナゾナゾのようだ。

このままずっと触れていたいののに、触れていたら、きっと俺は終わってしまう。

永遠の一瞬が今、俺の手の中にある。

そうか、この為だけに俺は生きているんだな。

素晴らしきかな、俺の人生！

「ねっ…ドキドキしてるでしょっ…」

返事など出来るワケがない。

「あれ？樹？」

蘭子は手を離して、俺の目の前で手を振っている。

「いつきー！」

「あ……ああ」

「…何？」

もしかして、いきなりだったから怒ってんの？」

怒るワケない。

「いや……良かったよ………ありがとう」

「エへっ…私、ホントは樹ああいうの嫌いかなって思ってたんだけど、そんな事なかったんだね」

当たり前です。

「うん…大好きだ」

「じゃあ、良かった！これから、いっぱい楽しもうね！」

「うん…お願いします」

「約束だよ？」

蘭子は小指をだす。

俺は、その指に、自分の小指をからめる。

「約束です…」

これで、これからいっぱい楽しめるんですね…蘭子ちゃん。

「よし…じゃあまず一発目！」

早くも一発目、キターー！

「…今夜？」

「い・ま・か・ら！」

わお！モーレッツ！

「さあ！一発目の部活、スッタートツ！！」

部活の事かいつ！

まったく、ウブな男の子を弄ばないでよ！

ケルベロ

俺と蘭子は、一年B組にやってきたが、教室は閉まっっていて、誰もいない。

ちなみに俺と蘭子はD組だ。

「あちやー、皆帰っちゃってるね」

「そりやそうだろ…もう6時になるんだからな。なあ、俺達も今日は帰ろうぜ?」

「えー…今日調べたいよ」

「そう言っても、長塚 京子がいないんじや、話も聞けないんだから仕方ないだろ?」

「うーん…でも…あつそうだ、B組に友達がいるから、電話で京子ちゃんの連絡先を聞いてみよつと」

蘭子はケータイで誰かと喋っている。

入学してから1ヶ月しかたつてないのに、どうして違うクラスに友達ができるんだよ。

社交性が高いな、蘭子は。

俺のケータイには、高校の奴の番号は、蘭子とカズチカしか入っていない。

あ、さつき二人増えたか…

しかしよく考えたら、暦はともかく、みやび様は相当なルックスだ。その連絡先をゲットできたっていうのは、かなりラッキーな事だぞ。

ロダン部なんか、どうでもいいが、っていうか関わりたくないが、女の子と関係が持てるっていうのは、正直シャイボーイの俺には、ありがたい話だ。

そういえば、ゲームでイノリと出会って、リアルでもみやび様と出会い、蘭子のおっぱいを手に入れた。

これは、今俺に波がきてるって事なんじゃないか?

イノリ、蘭子、みやび様、暦…四人も女の子がいれば、一人くら

い俺の事を好きになっても、おかしくないんじゃないや…。

うくん…：どうなんだろう…：これがギャルゲーなら、順番に攻略していくんだが、リアルじゃそんな事はできない。

まずは少なくとも、誰かにターゲットをしぼらないといけないよな。

誰がいいかな…：…？

イノリは、女の子らしい甘いルックスで、性格も良いし、しゃべり方も丁寧。

女の子と、出会ってからすぐに仲良くなれた事なんて、初めてだった。

そして、何よりゲームという共通の趣味を持っている。

今の所、俺の中の大本命だ。

ただ、現実のようで現実でない上に、ネカマの可能性がゼロじゃないんだよな。

蘭子は、中二の時から知ってるから、もう2年以上の付き合いだな。性格は明るくて、社交的で、見た目も良くて、学年でも噂になってたくらいだ。

ちよつとバカっぽい感じもするが、まあ女の子はその位が可愛い。

俺が気兼ねなく話せる、唯一の女の子かもしれない。

ただ、性格も、趣味も、外向きだし、俺とは正反対なんだよな。

それって、どうなんだろう？

みやび様は、もう見た目は100%。

ただ、得体の知れない怖さがある。

そのうえ、俺の隠れた下僕の才能を目覚めさせてしましそうだ。正直その方向は、もう少し大人になるまで、まだ眠っていてほしい。つつーか、まずみやび様が、俺の事を好きになるとは、到底思えない。

まあ、距離を保ちながら、目で楽しませてもらえれば、十分かな。

美少女と同じ空間に居られるっていうのは、人生でもかなり、貴重な時間だからな。

あとは、曆だが……

これは、今の所、攻略する気にはならんキャラだな。

ギャルゲーの隠れキャラのようなものだと考えておこう。

ただ、俺は最終的に、意外とこういうキャラを好きになる傾向があるんだ。

だが、あいつはマジで危険だから、気をつけておこう。

ああ、なんだか、考えてるだけで、楽しくなってきたなあ……俺の高校生活は、良いスタートダッシュを決めてる気がするぞ。

なんだよ、人生って、異性を意識するだけで、こんなにも輝き出すものなのか？

ゲームばかり、やってられなくなるじゃないか……

まったく、マイツチングだぜ！

「樹、何をニヤニヤしてるの？」

「……ん？……二……ニヤニヤなんかしてないよ！それより電話はどうなったんだ？」

「うん、京子ちゃん近くの公園に来てくれるって。行くつきやないぞ！」

「ああ」

俺達は、クラスに置いていたカバンを持って、近所の公園に向かった。

・ ? ? ? ? ? ?

「あ、いたいた！きつとあの子だ！」

公園に着くと、屋根のあるベンチに腰掛けている女の子に、蘭子が駆け寄り声をかける。

「えつと、あなたが京子ちゃん？」

「はい、長塚 京子です。」

あの…ロダン部の方…ですか？」

「そうでーすー！」

私が、蘭子で、こっちが樹。

私達も京子ちゃんと同じ一年で、二人ともD組なの」

ロダン部だと言うのは、ヒドク恥ずかしいが、とりあえず会釈はしておいた。

長塚 京子は、黒髪を肩まで伸ばした、高校生らしい大人しそうな女の子だ。

だが、ロダン部に依頼をするくらいだから、この子もだいぶおかしいのかもしれない。

「どうも、えっと、蘭子さんは知ってますよ。」

うちのクラスでも、可愛いつて有名だから…」

「えー、ホント？」

なんだか、照れちやうよお…

ああつと！そんな事より、あの…なんだつけ？

…：ペドロアンドカプリシヤスだつけ？」

ケルベロスの事を言いたいんだろうか…

「そうです、カプリシヤスの事で、相談があつて…」

俺が、間違えてるんだろうか…

「どんな内容なの？」

あたしも、みやびから詳しく聞いてないから、最初から教えてもらえろ？」

「はい…私には小学六年生のブン太っていう弟がいるんですけど…」

角刈りであつて欲しい。

「三週間前に、ブン太が友達と二人で自転車に乗ってる時に、その怪物に会つちやつて、

それから外に出るのを怖がつて、塾に行かなくなつたんです」

「場所はどこの辺なの？」

「三丁目の住宅街です」

「三丁目か…：高級住宅街だね。」

それで、その怪物は、どんな見た目なの？」

「……犬みたいなんですけど、首が二つあって……」

「首が二つ!？」

何それ!?!怪物じゃん!?!」

だから、そう言ってるじゃん。

「あ……そうだ、その時ブン太の友達がケータイで撮った動画があるんですけど、見ますか?」

「うん!見る見る!」

京子はケータイを取り出して、俺達に見せてくれた。

「ええ!？」

俺と蘭子は驚いた。

そこには、確かに、二首の犬が写っている。

ケルベロス……『地獄の番犬』などと言われる架空の怪物。

当たり前だが、実際には存在するはずがない。

しかも閑静な住宅街になんて、ありえない話だ。

動画は、15秒位のもので、夜に撮られている。

周りは暗いのだが、ケルベロスは街灯に照らし出されており、かなりハッキリと写っている。

大きさは、比較するものが、電柱くらいしかないが、犬としてなら、かなり大型犬の部類に入るだろう。

そして、一つの頭は左下を向き、もう一つの頭は右上を向いて、別々に動いている。

音声は、子供達の叫び声で、あまりよく聞き取れないが、確かに二つの頭が吠えているようだった。

俺の見る限り、この動画は、サイトでよく見る安いCGや、作り物のようには決して見えない。

おいおい、てつきりイタズラレベルの話だとタガをくくっていたんだが、

どうやら、バカにできない話のようだ……

一体、どうなっているんだ?

俺は、思わず顎に手を当てて考えていた。

あ……俺、ロダン部になってる……これは、ヤバス。

けるべろ2

「あの…あたしも、最初は信じられなくて。

でも、弟はそれから夜になると、怖がるんです。

だから、私もなんとかしようと思つて、一度、夜に三丁目に調べに行つた事があるんです。

そしたら、23時頃に、確かにそのバケモノらしきものを見ました。でも、怖くて逃げてきちゃつて……

だけど、弟が塾に行かないと、パパもママも機嫌が悪くて、ケンカしたりするんです。

だから、家の中の雰囲気も険悪になつたままなんです。

ですから、なんとか退治して欲しいんですけど……お願いできませんか?」

「うん!大丈夫!」

私たち、ロダン部におまかせあれ!」

蘭子は、胸を叩く。

胸が、プルッと弾む。

サンクス。

「本当ですか!?

ありがとうございます。

ああ、ロダン部に相談して良かった」

京子は喜んでいる。

蘭子も誇らしげだ。

まだ、何も解決していないのに。

蘭子はどうするつもりなんだろう。

まあ、あれだけ自信満々に引き受けたんだから、何か考えがあるのかも。

「では、私はコレで失礼しますね」

京子は、お辞儀をして、帰って行つた。

ケルベロスの動画は、俺たちのケータイにも送ってもらつた。

「さあ、樹隊員！どうしよつか？」

ないのかよ。

「なんだよ、樹隊員って…。」

どうするかを俺に聞くな。

蘭子が考えろよ。

簡単に、安請け合いしちやっただから」

「えー？」

だって、自信ありげにしなきゃ、京子ちゃんが不安がって可哀想じゃん」

「そうかもしれないけど……。」

でも、どうやってケルベロスを退治するんだよ」

「そうだなあ……勇者の剣とか？」

「持ってきてみる」

「もう……冷たくしないでよく。」

樹も考えて？」

「ええ？」

そんなの、俺にもどうすりゃいいか、わかんないよ」

「うくん……じゃあとりあえず、ミヤビに連絡してみよう」

蘭子はケータイをいじる。

「……あ、ミヤビ隊長？」

あのね、今ね……。」

……なんか、蘭子のこういう誰とでも話せる性格、ちよつと羨ましいな。

躊躇とかしたりしないんだろうな、蘭子は。

メンタル、鉄だな。

俺は、どうして異性と話す時、あんなに緊張してしまうんだろう。かっこつけ過ぎなんだろうか。

「……ラジャツ！」

電話が終わったようだ。

「樹隊員！今夜は、張り込みだーっ！」

「はあ？」

「だから、張り込み！」

ミヤビがね、動画に写ってる場所を探して、そこで見張って、調査しろって」

「え、張り込みって……」

メンドーな事言うなよな、みやび様。

「夜に、二人で張り込みなんて、ドキドキするね、樹！」

「……二人でって……」

夜に女の子と、二人つきり……。

イ……イベント発生だ！

これは、どんなハプニングが起こっても、不思議じゃない。

しかも、今日は金曜日だから、明日の事は気にせずにいられる。

夜中まで、ケルベロスが出なくて、蘭子が眠くなって、そのまま二人でお泊まりってパターンが、ありうる！

よし！準備だ！

「……そうか、仕方ないな。」

じゃあ、ひとまず一度家に帰って、ゴムを……」

「ゴム？」

「いや、ちつ違って……ゴ……ゴミを捨てて、食事なんかも済ませてから、集合しないか？」

「OK！じゃあ、今19時過ぎだから、21時30分に三丁目の公園に集合ね！」

良かった、ごまかせた。

「わかったよ」

? ? ? ? ? ?

俺は、家に戻ると、急いでご飯を食べ、風呂に直行した。

さあ、俺の伝説の剣を、念入りに研いでおこう。

今夜は、ドツキユーンと、ズツキユーンと活躍するかもしれないかな。

そして、スタンドを擦り切れるほど洗って、部屋に戻った。

確か、引き出しの奥深くに、あの伝説の鎧をしまっていたはずだ。中学の頃に使っていたペンケースの中に、その鎧は入っていた。俺は、その鎧を握りしめ、しばし思い出に浸る。

中二の頃に、夜中にコンビニで、この鎧『うすうす0，01』を購入入してから、一度も日の目をみる事なく、今日まで過ごしてきた。戦いに出る事なく、なんの危険もなく、ひっそりと過ごしてきたこの二年間。

いつか、自分の剣を振るう時がくるはずだと信じ、何度素振りをした事だろう。

雨の日も風の日も、1日も素振りを欠かした事はない。

しかし、冒険の出番はおとずれずに、素振りばかりが上手くなっていった。

素振りを終えるたびに、賢者が訪れて、俺をさげすんだ。

本当に、クソ野郎だと思えた。

生きる意味も見失った。

そして、もしかしたら、俺は一生このまま、村人なんじゃないかと思つて、不安になったものだ。

そんな、上からも下からも、涙を流した夜を、何度乗り越えてきただろうか？

だが、今夜、俺は冒険に出ようとしている！

…モンスター…いや、マンスターを倒す冒険に！

しかし、ちよつと待てよ。

どうやって、戦闘まで持ち込めばいいんだ？

すんなりいくとは、思えないぞ？

よし、シユミレートしておこう。

まず、

ケルベロスが出ない ↓ 蘭子が24時頃に眠くなる ↓ 背負つてホテルに入る…

…いや、これはマズイだろ、なんか拾ってきたみたいだ。

蘭子を起こす ↓ ホテルに行くか聞く…

うーん、行くと素直に言わせる自信がないし、言うとも思えない。

つーか、本当に蘭子は眠くなるかなあ…不安だから…
睡眠薬を飲み物に入れて飲ませる ↓ 背負ってホテルに入る

…

なんか、犯罪じみてきたな。

あれ？どうしよう。

けるべろから、エッチに持って行く方法が全然わからん。

その時にケータイが鳴る。

「ちよつと、イツキー！」

待ってるんだけど、来てくんないの？」

「ああ、ごめん！もう行くから！」

やばい、肝心の冒険の時間が過ぎてしまっている。

マンスターの機嫌をそこねたら、逃げてしまうかもしれない。

俺は、鎧をポケットにねじこんで、急いで家を飛び出した。

そして、伝説へ…。

けるべろ3

時間は、21時48分になっていた。

「もう！樹、ちこく！一体、何してたの？」

「悪い、母さんにドコ行くのか問い詰められて…」

嘘ダス。

「そうなんだ……ダメだよ、親には心配させないように、上手に嘘つかなきゃ」

お、なんだ？

意外と蘭子は嘘が上手なのか？

知らなかったぞ。

「蘭子は、夜に家を出るのに、なんて言っ出て来たんだ？」

「天体観測をするって言っ出て来たよ」

「へえ、それはいい嘘だなあ」

意外だぞ。

蘭子って、もしかして結構、夜遊びをしてたりするのかな？

いや、それくらい高校生なら普通か…

俺みたいに、ゲームばっかやってる方がおかしいんだよな、きつと

……

「えへへ…そうでしょ？」

さあ、早くカルパッチョを退治しに行くよ！」

刺身を退治するな。

俺たちは、ケルベロスの動画を見ながら、撮られた路地を探す事にした。

「樹…あの電柱じゃない？」

「違うよ、隣にマンションは写ってないだろ」

「そっか……あ、じゃああの電柱じゃない？」

「いや、横に自販機はないから、違うよ」

「あ、そっか。」

……あ、あそこにも電柱があるよ！」

「おい、蘭子……電柱は沢山あるから目印にはならないよ」

「ああ、そうなの？」

「じゃあ、何を目印に探せばいいの？」

「それは、動画の奥の方に小さく【ツクダ歯科】という黄色い電気看板が見えるだろ？」

「これなら、町内にいくつもはないはずだから、目印になるんじゃないか？」

「ああ、なるほどね。」

「樹、凄いじゃん！」

「あなるって言った。」

「別に大した事じゃないよ」

「じゃあ、ケータイでツクダ歯科を検索したらいいんじゃない？」

「いや、ツクダ歯科は、一丁目にあるんだ。」

「ここは三丁目だろ？」

「たぶん、宣伝用の看板だから、歯科の住所を探しても意味ないよ」
「なるほどー！樹って、こういうの得意なの？」

「こういうのって、探し物の事？」

「俺はよくアドベンチャーゲームもやるから、」

「そういう時に、こんな風にヒントを見つかるなって、思ったただけだよ」

「へえ、ゲームも役に立つんだねえ！」

「そうかもな」？

「俺たちは、夜道を看板を探しながら、並んで歩く。」

「ギャルゲーもやるけど、蘭子の攻略はどうすればいいんだよ、ゲームの神様あ…」

「あつそうだ！」

「ゲームだと、女の子にはだいたい、服が似合ってるって言えば、好感度UPだったな！」

「服…似合ってるな」

「え？そう？」

「女の子で、迷彩服が似合うってどうなのかな…」

「ちっ！こいつは、迷彩服なんか着てたのかよ！」

暗いから、本当にわかんなかったよ！

もつと可愛い服着て来いよ…

「いや…そういう意味じゃなくて…：ち…調査っていうシユチユエー
シヨンに、似合ってるって事だよ」

「うん、そうでしょ！」

そう思つて、これをチョイスしたんだ！

樹も、わかつてくれて、嬉しいよ！」

「あ、ああ」

よくそんなの持つてたな、お前。

「あつ、あの看板、そうじゃない？」

「ああ、そうだな、じゃあこの辺りに現れたんだろうな」

「チユロスが？」

「こいつ、わざとかか？」

「ねえ、樹。」

あそこに、小さな公園があるから、あの公園で見張ろうよ」

「ああ、そうだな」

俺たちは、目撃した路地の見える公園のベンチに腰掛けた。

「今は、22時40分かあ。23時頃に見たつて京子ちゃんが、言つて
たからもうすぐだね。」

ほんとに、でるかなあ？」

「さあな…」

ケルベロスが出るかどうかなんて、正直どうでもいいんだ。

そんな事より、大事なのは、どうやつて、このミリタリー少女をホ
テルに誘うかだな。

うくん…：何かいい案を考えよう。

俺は、集中する為に、ロダンの考える人になる。

「樹？何を考えてるの？」

「…：いや、どうやつてホテルに…：」

「ホテル？」

「…：はっ！…：いや…：体が火照るなつて…：」

「そう？まだ5月だから、暑くなるのはこれからだよ？」

「あ、ああそうだな、ハハ…」

あつぶねえー、集中し過ぎて、口に出ちまったよ…。

「暑いんだったら、何か飲み物買ってきてあげるよ、私はちよつと寒いから、あったかい飲み物、欲しいし…」

「ああ…じゃあ、コー………」

そうだ！

俺の頭の上に、LEDの電球が点いた！

…いや、これは実際に点いたワケじゃなくて、閃いた事を漫画的に表し……

どうでもいい！

「いやー…俺が、買ってくるよ、あったかいヤツでいいんだな！じゃあ待ってるよ」

そうだそうだ、良い事を思い出したぞ。

確か、カカオには「催淫効果」があると聞いた事がある。

カカオを使った飲み物、ココアを飲ませれば、蘭子もエツちな気分になるじゃないか！

ハツハツハ！神は俺を見捨ててはいなかった！

俺は、自販機でホットココアを二本買った。

コレを飲めば、蘭子もホットになつて……イヒヒヒ！

……念のために、もう二本買つところ。

俺は、四本のホットココアを抱えて、公園に戻ろうとした。

すると、公園の方から、蘭子が走ってくる。

「なんだよ、待ってるって言ったのに……あれ、もしかして、お前も実はそのつもり……え!?!」

よく見ると、蘭子は何かに追いかけている。

嘘だろ……ケルベロスだっ!!!

「いつきーっ!!」

「蘭子！来いっ!!」

蘭子は俺の後ろに隠れる。

俺たちに、向かって走ってくるケルベロスを目がけて、俺は持っていたココアを投げつけた。

一本めは外れたが、二本目は、なんとか命中した。

ココアは、ケルベロスの首に当たり、ガシヤンと音を立てた。ケルベロスのスピードが少しだけ落ちた。

「蘭子…走るぞー!」

俺は、蘭子の手を引き、全速力で逃げる。

かなり走って、後ろを振り向くと、ケルベロスはまだ追いかけてきている。

「ハアっハアっ…いつきー、なんか武器ないの!?!」

「んなもんは、ねえよ!」

あつても、モンスターと戦う勇氣など、持ってない。

マンスターと戦う武器はピツカピカだが、今は縮こまっている。

「ハア……ハア……あたし……もうムリ……」

蘭子は立ち止まろうとする。

「バカ、止まるな!」

「ハア……もうだめ……」

「ちっ……ホラっ!」

俺は、無理矢理に、蘭子を背中に背負って走った。

「蘭子っ……後ろ見てみる!」

「ヤダッ!まだ、追ってきてる!」

まったく……なんで、現実にあんなモンスターがいるんだよ!?

もしかして、異界との扉でも、どっかで開いたのか?

あんま、ややこしくし過ぎると、収集つかないんじゃない?

俺は、誰にしゃべってんの?

あゝっつーか……どーてるのままで、死にたくなんかねえぞ!

俺は、必死に走り続けた。

そして、どのくらい時間、走っていたのかはわからないが、蘭子が背中から話しかける。

「…いつき、なんとか逃げ切れたかも」

「はあ……はあ……マジか?」

「…たぶん」

はあ……きつつ。

蘭子って、意外と重たいんだな……あつ……。

ちよつと待てよ……俺は今、蘭子を背負ってるぞ!?

これは、家でシュミレートした状況だ!

しかも、この通りの先には、いかがわしいホテルがあったはずだ!
イケる!!

「蘭子……まだ、安心はできないぜ……しばらく安全な所に身を隠した方が良さそうだ」

「うん、そうだね。」

私も怖いし……でも、どこに隠れるの?」

「よし、俺に考えがあるから……お前はちよつと目をつぶっているんだ、いいな?」

「え?……なんで?」

「いいから!」

「……はい」

蘭子は俺にしがみつく。

俺は、そのままホテルの入り口をくぐり、部屋を選ぶ画面で、5階の部屋を選び、エレベーターに乗り込んだ。

このシステムは、二年前からシュミレート済みだ!

備えあれば、嬉しいな!

「あれ?エレベーターに乗ってるの?」

「蘭子、まだ目を開けるな!」

「はい!」

蘭子……素直なお前が大好きだ!

そして俺は、蘭子を背負ったまま、5階の部屋に入った。

やった……まさかの、ごつつあんゴール!!

ビバー!ケルベロス!

あとで、モンプチを買ってやろう

……それは猫か?

そんなことより、俺はついにマンスターの城にたどり着いた!!